公告●社長北海道漫遊中の爲本號に限り十五日發兌に延期致候次號は定期をたがへず發兌可致候

第四百四十九號目次

◎口繪

白知教育の開祖エドワード、セグインの肖像

◎社説

二種の世界聯合運動　H S 生

◎家庭

某學校女生徒の家庭日記

家の厄介　かも子

心づきたるまゝ　おもら、◎武士の家庭◎各地方の子守歌(二)

◎講義

夫婦アルカリの營養作用(中)　石塚左玄氏説

附雙親會食養の道歌

◎史傳

白知教育の開祖エドワード、セグイン　鷗村

◎文藝

文雅のたしなみ　長汀

評釋砧の聲　曲浦

◎雜錄

撰集抄ゝ讀む　蕉雨生

撰集抄ぬきほ◎古寺◎白菊◎友を懷ふ◎須磨の浦

◎時文

女子作文のはやし◎枯野の芒葛◎水上遊戲全書◎島左近◎芙蓉峯◎日の出島◎女子教育演説

◎片々◎時報

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や簡易實際を専らにし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學教界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。

◎單に十日發行の分のみを購求せんとする所望せらるゝものあらば其望に應ずべし

女學雜誌定價表

前金	廣告料	送金	注文
壹冊價 金拾錢 半年前金 金一圓拾錢 一年前金 金貳圓 (無郵稅)	一行 一回(廿十字詰) 前金十錢 同 三回以上 一割引 同 六回以上 二割引 但し不道德なる廣告は謝絕す。慈善の廣告は社誌の上無代價にて引受く	爲替は東京四谷區麴町十一丁目郵便受取所に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ふべし	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

●注意● 代金は凡て前金の事◎前金切れの節は封皮の捺印に御注意の上早速御送金有之度候

第四百四十八號目次

◎社説

那波氏の感恩講

◎女學

日本女子大學校の組織幷に大阪に設置するの理由　成瀬仁藏

貞婦を論ず　鷗村子

◎隨感

祇王祇女佛の悟(下)

山花われを待ちぬ◎征衣を盂蘭盆に染む◎幽明一家の交

◎評論

唯信是唯樂　落花淡人

◎教育

年少なる國家　曲浦

帝國大學卒業生の官途志望口◎六年間の帝國大學各分科卒業生數◎紳士の隱藝◎學校の衞生◎教育不振の罪◎學田の寄附◎臺灣及琉球の國性化◎世界主義と國家主義

◎雜錄

逗子のやれ貝　紫菀山人

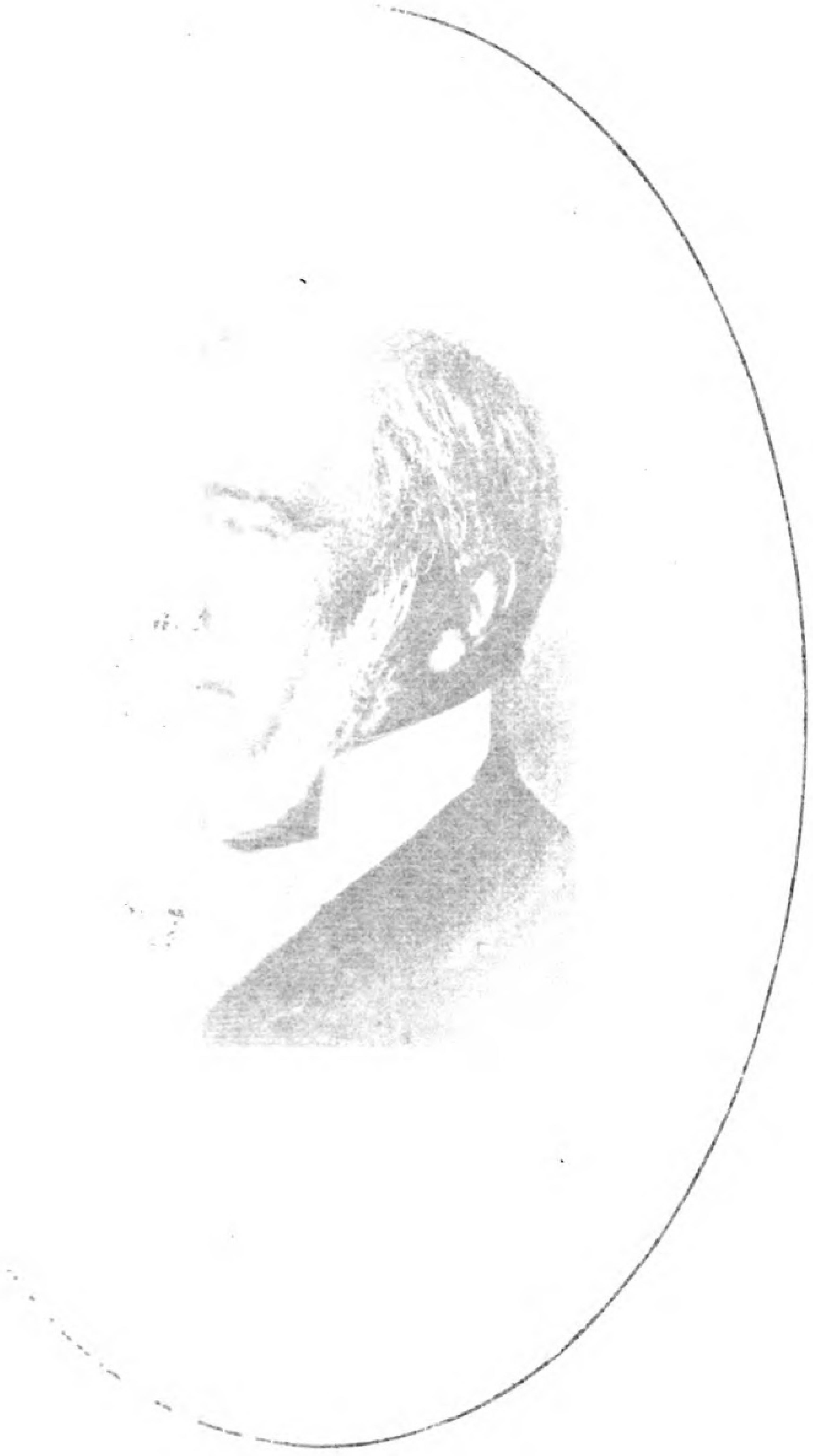
海士の刈藻、鎌倉の里◎六代御前の墓を弔ふ

◎時文

文天祥◎正則手風琴獨奏案内◎英語世界◎新橋藝者◎新小説第九卷◎新著月刊第五◎飛乘太郎◎反省雜誌夏期附錄

◎片々◎時報

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

（一）絵[illegible]

[illegible]

（二）時文

女学生文の[illegible]

[illegible]

（三）庄々の時報

[illegible]

（一）絵[illegible]

尹予のや[illegible]

海辺の[illegible]の里[illegible]の[illegible]

[illegible]人

（二）時文

[illegible]

（三）庄々の時報

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第四百四拾九號

明治三十年九月十五日發兌

社說

一種の世界合同運動

赤十字同盟と婦人矯風會

田の生

凡そ人類の歴史は、これ小なるもの丶漸次に大に合同したる事蹟にして、彼の部曲に集りたる蠻人が、幾十世紀の後に、聯邦に合する開化人となりし進歩は、即ち文明の潮流の大方針に由るものなり。世の未開なるや、合同を來たす主勢力は、戰爭なりしも、開化の度進むに隨つて、戰爭より政治となり智力となり、更に宗教となり、遂に博愛、人道となる。而して世上万般の動力は、其物質たると靈性たるとを問はず、或適種生存となり、或は弱種開導となりて、世界人類をして小を棄て丶大に合し、遂に統一親和を來たすべきの動力たるものなり。天下の人類は將來に於て、凡ての堡障より放たれて、全く合一すべきもの大運命を有せり。不可思議者の大能力は、先づ適當なる國民を導いて、開化文明の域に進ましめつつ、此處より彼處より其手を下して、冥々の裡にこの大運命に向つて、人類を導く。

物質的文明は、今日の如くに絶大の進歩をなし、特に交通の機關悉く備はりて、天然の距離を短縮し、万邦比隣に等しからしむる所以も、また暗々裡に、世界を幾重の大鎖によりて聯結して、此大運命の方向に、一歩は一歩よりも近づきつ丶あるものなり。猶今後幾層の進歩あるべきや、測り知るべからずと雖も、畢竟其大方針は此點に在り。物質既に然り、況んや、由來一視同仁を大主旨とせる、宗教、敎育の如き博愛にして且つ人道を重んずるの事業をや其比年宏大の進歩をなすとや、これ亦彼の大運命の方向に層一層の近接を加ふるものたらずんばあらず。既に先覺國民の靈性と智識とによりて、宗教及び敎育に希代の進歩を來たしたるが上に、万邦比隣に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

等しき交通の利便によりて、到る處に異邦の民を教化して、彼此の間を密接ならしむるあり。宗教といひ教育といひ、各個國の特色を帶ぶると雖も、其進步の最大目的は即ち、人類の合同に在り。葎の雫、荻の下露と異なれども、其谷川を下りて流るゝの針路は海洋なり。國々の智識、道德は此點より彼點より導き進めらるゝと雖も、最後の極は即ち彼大運命に存す。凡眼多くは此大動力の陰約裡に嚴として存在するとを曉るなし。

當世紀に於ける宗教、傳道の發達と教育普及の効績との、那許り人類合同の方計に向へるかは、今、之を論せず。然るに此處にもと博愛人道を重んずるが故に興起したる有力なる二大運動の世界統一の爲めに活躍しつゝあるものあり。而も其二つのものは、不思議にも、繊弱を以て稱せらるゝ婦人の力を俟つと多きものなり。其二つとは何ぞ、即ち赤十字同盟と婦人矯風會とこれなり。吾人今爰に聊か此二者の世界合同的大運動たる所以を論ぜんか。

クリミア戰爭の大慘狀は、英國に義俠なる一淑女の情熱となり、可憐の身を挺して、兵車過ぐるの跡に、病傷の人を救はしめ、普佛戰爭の大破壞は、瑞西に博愛なる一義人の血淚となりつゝ、此二因の歸する處は、瑞西に於て赤十字同盟勃然として起れり。其目的や、古來幾千年來傳はり來りたる戰爭の主義を破ぶりて、其精神を變へ、病傷せる兵士は、其味方たると敵たるとを問はず、皆之を救恤看護すべきの義務あるものとなし、爰に國際公法の上に一大條目を立て、今や此同盟に加入せざるは、文明諸國の耻つべき事となれり。此同盟たるもと基督教より出づる博愛の主旨によるものなれども、我邦の如きは、明治十年の內亂に博愛社といへる、彼と殆ど主旨を同じうしたる運動ありしが爲めに、異教國として之に加入するを許可せられたり。而して近くは日清戰爭の際の如きは、此同盟ありて以來、最も美しく且大に其精神を實地に發表するの機會となりて、万邦仰視する戰捷の名譽の多分は、其効績に歸するものといひて可なり。

今日、赤十字同盟本來の博愛主義を、最もよく奉戴して、之に殉せんとするものは、米國のクラ、バートン孃なり。バートン、六十餘歲の老身を提げて、或はアルメニアの虐殺に赴き、或はキューバ島の反亂に馳せて、病傷窮乏の徒を救濟

せり。その過ぐる處には、敎化未だ普からざる彼等國民をして、仁愛あつき他邦人を慕はしめて、パートンの祖國に親しみを加へしむ。米國に在りては、彼の事業の爲めに、奮つて義金を投ずるもの、頑是なる小學生徒すら其數多く　彼等はみな遠き異鄕の窮民を愛恤するの　志を熾んにせり。彼此如斯にして、暗々裡に聯結親和を來たしつゝあるころ、即ち此慈善博愛の事業の大主旨とする所なれ。パートンは當に第二のナイチンゲールを以て稱すべし。其志もとより赤十字同盟の存否に關するものに非ず、たゞ博愛の義心を以て、一視同仁、人類歸一を目的とするが故に此事業に投ずる者なり。』

我邦の如き赤十字社員の名は、たまく〱以て心なきものゝ僞善を飾るの弊なきに非ずと雖も、目下數十万と稱する社員は、曩には健全なる淸兵を敵として、病傷の彼等を友とするを背じたるものなり。其胸間に燦かせる社員章は、人類の親交を是とするの左劵ならずや。

赤十字同盟の事業は、多くは形式に流るゝの嫌なきに非ざれども、其運動は、進歩の今日の如きにして止るべきものに非ず。素より未だ幾千百年の後なるべきやを豫知せずと雖も、其着々たる進歩は形式を脱すること多きに隨つて、いよ〱精神的となり、同じき方針に在る天下凡百の動力の中にも、最も優れたる効績を奏するものゝ一として、かの野蠻なる戰爭の蠻習を排し、嫉視的外交を退けて、遂に世界の人類を一に親和合同せしむることなくんばやまさるものなり。

フランシス、ウイラード孃が、天來の默示を得たりと稱して、婦人矯風會なるものを米國に起して、禁酒禁煙をはじめ、社會百般の不良不潔なるものを改善するの主義を以て、天下の基督敎徒婦人を糾合するや、處在響の如くに應じて、今や世界の諸邦に、同主義の會合其數多く、皆共に氣脈をウイラードに通ぜり。ウイラードの勢力は實に驚くべきものあり。ステッドは、英國女皇と此人とを以て、當今の二大婦人と呼び、且つ後者に呈するに『世界無冠の女皇』の敬稱を以てせり。婦人矯風會の事業を以て、米國女子の突飛的運動となすこと勿れ。其主義たる酒を禁じ、阿片を禁じ、一夫多妻の弊習を禁ずること、万邦共に同じかるべきを希望して、之を各國の主權者に請願せんが爲、世界所在の同主義の男女の調印を得たる請願書即ちポリゴルト、ペチションと名くるものは、正に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

數十大卷の多きをなし、ウイラード等同志の婦人は、將に一船を新造して、此請願書を滿載し、かくて萬國を巡回し、多くの主權者に謁して、之を奉呈し、堂々其主義を唱導せんとす。又其準備として、既に七回次の世界巡回遊説員は、各纖弱女子の身を以て、熱心に其使命を傳へ。猶、各地の會合は、それ〴〵其國々の社會改良運動の爲めに、多數の婦人を結合しつゝあり。吾人は此社會改良の事業の如き、容易に成就すべきを信せず。然れども、彼等婦人の百折屈せざる運動は、其効果見ゆべからざるが如くにして、其實人類合同の爲めの一大動力たり。その博愛慈善の同一主義の下に、天下の婦人を糾合して、彼等をして眼を閨門の外、遙に世界全躰の社會改良に注がしめ、万邦共に親和すると女性に於て密ならしむるもの、蓋し、將來の大運命に對して、『世界無冠の女皇』なる約束を有せるものたらざるを得ず。例令また現在の婦人矯風會なるものゝ破壞するとあらんにも、博愛慈善の主義を以て、天下の婦人を結合するの運動は、必ずや起り來るべきものなり。それ一家一社會の團結は、先づ婦人の隱密にして且つ大なる内部勢力よりはじむるを以て最も堅固なりとす。されば、世上人類の合同一致の大運命は、各國女性の聯合親和の運動を要するや必せり。かの赤十字同盟の如きも、其性質より察すれば、全く婦人の事業なり。幾多のナイチンゲール、幾多のクラヽ、バートンありて、よく其本旨を遂行し得るものなり。赤十字同盟の事業の大目的たる、既に論ずるが如し。世界統一、人類合同に於ける婦人の勢力、豈に大ならずや。ナイチンゲール、クラヽ、バートン、及びウイラードの如き、其功業は亞歷山、那翁と雖も、なほ及ぶと能はざるものあり。

宇内の諸動力は、皆な人類統一親和の大運命に向つて進めると、恰も百川の海に朝するが如し。物質の文明既に然り、宗敎の傳道及敎育の普及は、實に此大運命の爲めにのみ存するといふも可なり。宗敎、敎育の發して、博愛となり、人道となるものは、人類を導いて、智徳を開き、人種〻區別を破りて日々に近く彼此の親和合一に來らしめんが爲めに、種々の運動をなす。而して其の中頗る勢力に富めるもの、吾人は之を赤十字同盟と婦人矯風會との二なりと信ず。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

家庭

某學校女生徒の家庭日記

學費に乏しき家庭の女兒を集めて敎育する、某といへる學校にて、一敎師試みに、其生徒等をして、日記帳を作らしめ、毎日家庭に在りての所作を正直に記さしめたるものを見るに、以て彼等が家庭に於ける狀態、其生ひ立ちを窺ふとを得べく、敎育家乃至主婦等の心掛けともなり、戒めともなるふし尠からず。されば今左に其多くの日記中より、處々を摘みて錄す。

（一）（士族、伯父母の手に養はる。伯父は多少の敎育あり。十四歲、二學年生。）

七月二十三日　晴　木曜日

朝五時に起きふとんをたゝみ又かほをあらう茶わんふくだいどころをふくぜんだてをするごぜんをたべる七時より九だんへ朝がほ見に行くかへりにかんこを塲にてぼうしをかう十一時半にかへるきものをたゝむぜんだてをするごぜんたべる茶わんをふくだいどこをふくすみを出す白玉とにるきくのかんざしこしらへるとき手をはさみにてきり伯母さんにしかられるこうやくかうてはる氷かいに行く白玉たべるだいどころふくすみ出すかんばんとりこむ水をいれるごぜんたべるぜんだてするゆをつかうばん通りへ下たかいに行く茶をかいに行くとこをしいてねるをかしをたべる

七月二十九日　晴　木曜日

朝四時にをきふとんをたゝむきものをきかへる茶わんふくだいどこふくおはちあぶるかほあらうぜんだてするつまみなかいに行くごぜんたべる茶わんふくだいどこふく酒かいに行くきものきかへるかみゆうすきあぶらかいに行くゆをくんでくる魚屋へ行くかんぶつ屋へゆくぜんだてするごぜんたべる茶わんふくだいどこふく手紙としようのとをかいに行くうちかたずけるのりしぼるすみ出す水のむおかしたべるふくろはるのりかいに行くたいどこふくかんばんとりに行く水入るすみ出すにわはくしやぼんかいに行くごぜんたべる魚ぐしあらうのをわすれてしかられる火をこすおゆに入るおさらひするおかしたべてねる。

（二）（士族、父は神主相應の敎育あり。母また多少の文字を解す。兄は官省給仕某小學校尋常三年級卒業後本校入學。十三歲。）

晴天　たつノ日　廿一日

朝六時におきそうじしかをゝあらゐ御飯を食しちやわんをあらいかみをゆわゐ洗たくしひとゐ物二枚あらゐうちの赤子のなくのを見て居りましたもんですから父に三ッぶたれ

ました其れより客人まゐる使にあるく
曇天　みノ日　二十二日
午後は氷一はゐのみ五時まで遊んだ其れよりそをじをしぞをきんがけをし飯を食しちやわんをあらい用して後は九時まで遊んでね

（三）（平民父は官省の小使、母は髪結共に多少の文字あり。十一歳。）

二十一日はあさおそくおきておばあさんとけんかおしてひるまは一日おこつていて夜ははやくねてしまいました
二十二日は朝つから少せつをばんまでみました
二十四日朝早おきかみいッてもらいはんがけがないとておこつたもんだからお母さんにしかられおひるからはあみものをして夜はあたごさまへいつておそくかへつてきました

（四）（平民、父は採擦治、母は巻煙草内職、父は一丁字をも解せず、母僅に之を知ろ。本人に對する父母の望みは來年は奉公に出して早く賃錢を獲んさなり。十四歲。）

一日の朝はをきましてはなをかへに行ましたそれからかへつてきてからおかさんに一錢もらつておそなひをかへに行ましたそれからごぜんをたべてから す こしたつてからおつかさんにせなかをぶたれましたそれからはらがたちましたからあたまをむしてからすこうしひるねをしましたそれからをきてかをゝあらひましてだまつてきんじよへあそびにでましたそれからたしかよびにきましたからかへつてきてちよいとあがりくちでねころびましたそれからつかいにゆきましたそれからをとつさんにうそをついたもんですからをとつさんにしかられましたそれから朝ごぜんをたべるときに兄さんとけんかをしましたそれ から いもうとおこよばへつれてゝやるときにいもとにめんどくさいとかうるさいとかいつて又さあをいでとかいつていもうとをこづきましたそれからそのいもうとともうひとりのいもうととけんかをしましたそれからいもうととけんかをしたときにちくしようめはりなぐるとかなぐりつけるとかいいましたそれから　………をかさんのことをばかだとかばゞあつていいましたもんですからおかさんがこゝへはへつてきやがるとかあがつてみるとぶんなぐるとかはりたをすとかいゝましてそれからおとつさんのことをめくらめつていいました十日の日に……私がおかさんはをこの（おこのとは御茶の水事件の被害人の名なり）によくにているといいました　………十日の朝は早く五丁目の方ときようばしの方つかへに行ましたそれからかへつてきてをはしを一錢もらひました……一錢もらひましたもんですから五りんでゆであづきをたべようと思ひましてその五りんをあづけてをきましたのちになりましてたべました………おかさんがあしとかあしのうらとかをたゝいてくれていいましたからあしとあしのうらをすこしたゝいてもういやだつていつたもんですからをかさんがじやあもういいていいましたそれからなをしといふをさけを二せんかへに行きました……　……いもうととけんかをしていもうとにしんでしまへといいました………

（五）（父は某家の僕手紙位をよみたゝむ。母は文字なし、姉は田舎藝者。十三才。）

二十九日夜おつかさんにむかしのはなしをしてもらつて居りました

二日おつかさんのかたのすじがつまつてはたらけませんからおちやわんもあらひ米もとぎそうじもしました水もくみましたおつかさんのかたをひやす氷も買にゆきました

五日おとなりの内でみんなあつさあたりでねて居りましたからはたらひてあげました

（六）（士族父は某校生徒取締父母共に相應の文字あり兄弟皆就學す、十五才。）

二十四日ハ六時ニ起キトテ母ハ大ニシカリマシタ母ハ朝餐ノ仕度ヲ爲シヲハリテ火鉢ノ前ニスハリテヲリマシタヲマイハ朝睡ヲスルト頭カイタムカラ早ク起キナクレバイケナイトイイマシタカラ私是カライツモ早ク起キマシヤウトヲモイマシタ午後ヨリカミヲアラヒ友ダチノ處ニユキマシタ家歸リテ睡マシタ

二十五日ハ朝三時ニ起キテタイドコロヲアケテナルタケヲトノセヌヤウニシテ水クミニハヲハキマシタトキハトケイハ四時ヲウチマシタ門ニデヽ見ルトコヅキガ居睡ヲシテテイマシタ私ハコヅキヲ呼ビヲコシヲマイハコヽニ居ルトシカラレルカラ早クヲカイリトイイマシタコヅキハ腹ガスイタカラタツコトガデキナイトイイマシタカラ私ハカハイソウニナリマシタカラ家ニ歸リ食物ヲ與イマシタコヅギハ喜ビテ此處ヲサリマシタ夜ハアケマシタ家カイリマシタ母ハ火タイテイマシタ私ハ此コトヲ父母兄弟ニハナシマシタ父母ハ喜ビマシタ…………

因にいふ以上の日記は多く夏期休校中に際するものなれは其心して見るべし。

家の厄介

かも子

なさぬ中の子を守り立てゝ、慈むと我子よりも劣らじものよ、此子故に、あらぬ名を立てられ、家の名を汚さじとの、日頃の心掛篤き主婦は世に少からず。また變に臨みて、我實子を棄てゝ繼子を救ひて、烈婦の芳名を傳ふるものあり。此等は即ち義理を重んずるの故にして、其行ひや仁俠なりと稱すべし。如斯きは、以て世の鑑、人の規となすべきものならずや。然るに之に反して所謂繼子あつかひをなして、義理ある子を惡むが如きは、まとに賤しむべきのとぞかし。繼母繼子の反目嫉視するもの、素より其衷情の察すべきものありと雖も、あらぬ浮名を呼ばれ、忌まはしき事柄を惹き起して、家庭を亂すやうなるは、假りにも母となりし者の、之を慈しむと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の足らぬ罪多しといふべし。
また親族の子女、不幸にして、孤獨となりしやうの場合に、之を引き取りて、我家に養ふときに、往々此等を目して、厄介者となし、そのやうに取扱ふものありて、爲めに此不幸の兒をして、其家の實子の幸福を羨望せしむるとあり。哀れむべき次第にして、かゝる家庭の夫妻、分けて多くは妻の心掛の程の足らざる、實に淺ましといふべし。世には何の緣もなき他人の孤兒を引取て養育する者さへあるに、況して此不幸兒は、緣故一方ならざる兄弟の血統にして、其家名を相續すべきものなれば、厚く之を慈しみ、よく之を養ふべきの義理あるものなるを、一時の入費を厭ひて、此重き義理を忘るゝは、抑も何等の卑劣事ぞや。同じく祖先の目より見れば、之もまた鍾愛すべき子孫なり。然るを兄弟は他人のはじめ、其孤子は、大なる厄介者と見做すは、人倫に反すといはずして可ならんや。既に孤子となるの不幸あり、次ぐに厄介者となるの不運あり、此兒の運命もまた悲慘なるかな。一たび之を養ふに於ては、よく繼子を養はんとするの心掛を以て、之を愛育せずして可ならんや。

先つ頃某より某まで汽車にて行きしに、坐の傍らに、十七八の下女風情の女と、其伴へる十一二才計の少女とあり。年嵩なる女の人に語りていふやうは、主人なる人は、某の國の郡長にて渡りしが、病氣の爲め、此程務を辭して、東國の海濱に、暫く家を移して保養せんとて、今は其旅中にあるものなり。家の荷物の夥しき事、簞笥のみにても十幾竿ありて、貨車一臺を借り切りて既に送りたりといひて、さも傲りがなり。傍の人之を聞きつゝ、御主人達は何處にあるかと問へば、上等室に在りと答ふ、さらば此御子は御孃樣にやと問ふに、いや御親類のなりといふ。これ等の話を側聞きして、さては此可憐の女兒は、定めし例の厄介者なるよと、其子の運命を一方ならず哀れと思ふ中に、乘り換驛に來りしかば、彼二女も車を降るに、彼少女は重き包を提げて、辛うじて、橋を上り下りするさま、いといたはしかりき。さてその主人夫婦といふものの下りしを見れば、上等客ぞといふ面付の、はやさげすまれ、伴へる二人の男兒、我實子と覺しきは、生絹の長き袖したるを着せて、駒下駄穿かせ、さもみやびたり。然るに彼親類の子といふは、浴衣のまづしきを纏ひ、杉臺に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

やあらん。塗木履の粗末なるを穿ちたるに、彼實子と此子とを思ひくらべて、更に哀れを増せり。而も同じくこれ家族の一人に列すべき下女をさへ、車を分ちて、上下を差別するだに、其主人夫婦の心底の賤しきと、見え透きたるに、況して、親類の子とて、世話するものと見ゆるをも、下女と同格に取扱ふまでに卑陋なる、たゞ呆るゝ外なく、如何にエラサウなる風采をなすとも、たゞに嘲笑を値ひするのみに過ぎざりき。定めし彼等夫婦の言ひまへには、彼子にまでは、手が届かぬといふなるべけれども、此言ひまへの畢竟我心を欺くものにして、其無效なるとは、人を俟たずして、自分の良心に明知せん。世上大方の人の、他人の子を世話して實子同様には手が届かぬといふは、届かぬに非ず、届かし度くなきなり。厄介ものたるの境遇愍むべきかな。彼日、此狀態を目擊してより、彼少女が不運を愍むの情、今に至りて禁ずる能はず。從つて彼郡長とかいふもの夫婦の賤劣なるを嘲る。

山寒し心の底や水の月　　ばせを

心づきたるまゝ

◎紙類　　おむら（投）

紙は日々用ゐずに濟むと云ふ事とては無ものなり。されば一枚二枚と思ふても一日の中には幾十枚を費すに至る。故に鼻紙、手ふき紙などは最も注意して無駄つかひせぬ樣になせば餘程の違はあるものなり。枕紙などはランプ掃除に用ゐて事足る。但し枕には紙よりも枕ぎれとて手拭の兩端をぬひ置之を定めて、あちこちと少し油氣つきなば折かへして用ゐ、汚れ附かばソーダ水にて振出しては用ゐれば紙よりは柔かにて心地よく、殊に夏の夜の汗に紙の塵など、襟元に止まることの不都合もなきものなり。

己の用は節し得らるゝ丈ケ節すべし。併客に菓子を包みて進ずる時などは、尤も心して沁出さぬやう、二枚にも其上にも重ぬべし。斯る時に惜むは愚の至りなり。是等の用に日々幾枚の事にもあらざるを鑒みよ。

ほそき紙切は、小箱の中になりと心して仕舞ひ置ば、紙捻の要る時などに直と取出して間に合ひて、嬉しきものなり。又反物の帖紙四ッ手文庫紙等も不用の時に心して仕舞置かば、何

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時か誂へ向と云ふ場合出來るなり。何品に因らす節すべきは素よりの事ながら、別して紙は日々缺べからざる物なれば最も注意すべきなり。

◎品物に名を記し置事

夏は冬の寒さ着、股引或は肩掛の類を暑苦し抔云ひて、再び用に立ぬかの樣に見捨てたるも、氣候かはれば又必要は起るものなり。故に夏になりて冬物を仕舞ふには、風呂敷包みにて、紙包又は箱入にしても、其品物を一寸記し一目にそれと明かなるやうになし置べし。斯く鳥渡の心掛さへ有ければ、如何に數多き諸道具如何に藏多き家にても、急に入用の事あるとも、落付て事を爲し得べきなり。殊に主婦となりては、出產の時などもありて、自身計り物の出入をなし居らるゝものにあらず、人の手に懸かるには是等の心得こそ最も大切なり。第一筆まめに記し置けば物にすたりを來す事なく、久しく用ゐざりし茶器も出で、礑と忘れてありし花瓶も久し振にて床に飾られ、來客の賞に預る事もあり。少しの心構にて家具一切を活用させ得べきを、一筆の事を面倒がる處より、偶々家主が秘藏の器具を出せよなど、命を受けては、大に狼狽し、アノ棚に在るのか、夫れとも此片隅に見ゆるのかと、彼是と打騷ぎ、女中もお守も集まり來て、違ふ品をいくつも出して、一時二時と時を過せば、見せたかりし客人は歸りて跡は家主の怒を見るも、皆聊の事を怠るが故なり。記名の事は殊に心して置べき事なり。

武士の家庭

古へ封建の世、武士の家庭に處して之を整治するの心得を說くものあり、曰く、

武士たらむものは、我が妻女の身の上に於て、心に叶はざる義有之候はゞ、事の道理をいひ分けて、よく合點致す樣になし敎へ、少々の義あらば思ひ免し、堪忍仕りて差置き尤に候。然れとも元來心だて惡く、畢竟用に立間敷と存ずる程ならば、一向に暇を遣はし、親のもとへ送り返すは格別の義に候。左りながら左樣にも致さす、我が女房と定め、奥樣、かみ樣と人にも言はせて差置く者に對し、高聲

を揚げ、種々の惡口雜言に及ぶは、市町の裏屋背戸屋の、傭夫役丁の風情は格別、既に一騎役をも勤むる武士の所行には、決して有まじき義に候。況や腰刀などをひねくり廻し、或は振り拳の一つもあて候類は、言語同斷の事にて臆病武士の仕業に候。子細を申すに。武士の娘に生れ、人の女房と成程の年齢にて、男子の義ならば、人に拳をあてられては、中々にこらへぬ筈なれど、女性の淺ましさに、是非なく涙を流して、堪忍をば仕るにて候。總じて我に手向ひのならぬ相手と見懸けて、理不盡の仕形に及ぶ義は、猛き武士の嫌ふてせぬ事を、好みて致すものをさして、臆病者とは申にて候。初心の武士心得の爲め仍て如件。

（武道初心集）

●各地方の子守歌（二）

●越後(長岡)

れんれころころ竹のいち、竹に追はれて泣て來た。どうからどこまで泣て來た。こゝからお寺の前まで泣て來た。お寺のおくさん何なさろ、立つたり、れまつたり(坐)、お茶くんで。

●越中富山

鳴くな鳴くなよ雀の子、鳴くさ餌差がつれにくろ。ぼッちやのお守は、どこへいた。どこもゆかれご里へ行た。お里のおみやに何もろた、でんでん大鼓に笙の笛、なかいて見たならようないた。

●京都

こちの此子にあかいべゝきせて、連れて參ろかのゝさまへ。のゝへ參たら何さいふてながむ、一生此子のまめのやうに。

●大阪

れんれころいち、天滿の市よ。大根揃へて船に積だら、何處まで往きやる、木津や難波の橋の下。

●備後

れんやれんれんや、れんれの守は、どこいッた。府中町へ茶買ひに。茶を買ふたらはよもどれ。戻らにやいなうよ。どッちの方から、いなうな。山越えて、里いッた。里のみやげに何もろた。でんでん大鼓に笙の笛、誰にやろさて買ふて來た。れんれにやろさて買ふて來た。

今日二十五日さ、あすはこの子の宮參り。宮へ參たら、何さ云ふて拜むさ。一生此子の、まめな樣にさ。

れんやれんれ、れたら餅ゥ買ふてやろ、おきたらやいとう(灸)すゑてやろ。

●伊豫

れんれ子、さんれ子、酒屋の子、酒屋がいやから嫁入さしよ。嫁入の道具はなアに、たんす長持はさんばこ。これほど仕立てやるものを、去られて歸るは高慢ぢや。

●土佐

かちかち山のお兎は、なぜにお耳が長いか。親の體内に居る内に、枇杷の葉をたんさたべ、それでお耳が長いぞ。

●鹿兒島

れんれがお守は何處へ行た。あの山越えて里へ往た。里のおみやになにもろた。牛の子一疋馬の子一疋もろた。其馬どこへつないで置いた。向ふの笹やぶへつないでおいた。今日往てみやうか、あすいて見よか。明日いて見たれば、其馬は居ないで、あちらあせり、こちらあせりして見たれば、むくを一ッひろた。かみわろもをしく、つまみわろも惜しく、かみわりて見たれば、三ッになるちごさんが、社杯を着やうさしておッしやる。何のもやうをつけやうか、松に下る藤の花。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

わんれこやう、おころりやう、れんれこやうおころりやう。

●琉球(宮古島)

んにやなくな(最早泣くな)おさがまーよー(小弟よ)。ホーニヤホーイー。(雛なり)。んにやよーむーなー(最早すれるな)、おさがまーよー。あがずざと(東里)むーなーかんよー(眞中に)。ホーニヤホーイ。ふーれーらーぎーやー(九年母を)、いーびーれーまーいーよー(植付けて)、チチヨラーヨー(雛なり)。いーびーわーまーの
ー(植付た)。このりやむよー(一年目に)、ホーニヤーホーイ。さーまーわーまーの
ー(挿して生へさする)、このりやむよー、チチヨラーヨ。

講義

夫婦アルカリの營養作用(中)

(陸軍藥劑監石塚左玄氏の演說)

◎肉類を食すれば、躰溫の爲めに、其含む處の那篤倫鹽が特有の脱水作用を起すを以て、其質は凝縮せられ、其嵩は減少するを以て、最初は滿腹の思ひあるも、忽ちにして空腹を訴へ、且つ其脱水せられし水分は營養水分の一部なるを以て其缺乏を補給する爲めに、渴を催して、自然湯茶を多飲す。

◎之に反して蔬食の如きは本來加里鹽を多有するを以て、躰内にて吸水作用を起して、漸次に消化し、一定時の後に初めて自然の空腹を覺ゆ、俗に薯の汁は腹に持ちが食いといふも此理なり。

◎故に肉食の消化吸收に速かなりといふは、たゞ外觀の說にして、その眞の理は前いへるが如きものなり。今の肉食營養論多く信を置くに足らず。

◎食鹽もしくは曹達劑は食物の消化を助け、また胃液の分泌を増すといふは、これまた外觀に誤まられたるものにして、これ等の那篤倫は自他の物質より脱水作用を起して、其物質をして凝結縮小せしむるを以て、消化の効を速かならしむるやうな、一寸は思はるゝなり。鹽茶。鹽菜にて飯を食へば、食慾は增進するといふも、この脱水作用の力あるが爲めなり。

◎太白の砂糖に鹽を混じたる白餡の汁粉二三碗を食すれば、胸につかへ、溜飲を起すとあるは、其汁粉には加里鹽の殆ど皆無なると食鹽あるとより、脱水作用を逞しうして、胃や口に水が溜る故なり。之に反して赤豆を煮て、糖鹽の二者を混じたる田舍じることは二三碗食ふとも溜飲の患なきは、これに

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

は食鹽ありと雖も、加里鹽の多量なるより、脱水作用を抑制して吸水作用を起し、血液の循環をよくする故なり。また渴を訴ふるとも稀れなり。胸のつかへたるに大根卸しを食するも、脱水作用を抑制するが故なり。

◎那篤倫鹽は保温者なるを以て、冬季に在りて、鹽茶をのみ鹽湯に浴せば、寒を防ぐとを得。されど食鹽の過剩は、高熱を起すとあり。また瀕海多鹽地の人民は裸躰を好む。彼の希臘國の畫工が古代より裸躰畫の妙處に至れるも、多海國人民の然らしむる處、那篤倫鹽の多食に基因するものなり。

◎されど食鹽の過多食は、血液凝結して循環不充分なるより頭熱足冷を來たす。故に眞の保温用としては、加里鹽の多きものを食用するの必要あり、西京人が大根と油揚(加里鹽に富む)とを煮て食すれば暖しといひ、清國人が生平脂濃き食物を食し且韮蒜を盛に嗜むが如き、其他葱の如きは、躰を温むるの用あり。殊に油膩濃き食品は、暖地より寒地、暑時より寒時に進むに從ひて、其必要の度次第に增大するものにして、我國にても關以西南人の關以東北の人の如くに天麩羅蕎麥の如きものを嗜むと尠きも此理なり。

◎温浴並に發汗は人躰の脱鹽法なれば、那篤倫の鬱結を防ぐが爲めに必要なるものなり。而して温浴の必要は海少陸多國の人民よりも、海多陸少國の人民に、遠海山地高燥地の住民よりも、近海卑濕魚鹽地の人民に、原野乏水地の人民よりも却て河川地の人民に、北方及び寒地の人民よりも、南方及び暖地の人民に必要にして、其目的たる身躰を清潔にし、又啻に神思をして爽快ならしむるのみならず、動物の質性たる運動を外にしては、入浴以て血行を利し、腠理以て汗孔を暖め發汗以て躰内に鬱滯せる食鹽を排除し、爲めに暗に却病保生の大旨を施行するものたり。

◎又入浴温度の加減は、身躰を清潔に爲すの外、其人の習慣勞逸及び居所季候等によるは勿論なるも、其實は本地に產する食物の化學的性分と食物に加味する食鹽の多少所謂調味の鹽加減とに由るものにして、即ち入浴の温度と度數の多寡とは、躰内に輸入する食鹽の量に正比例するものなり。故に大酒家に非らざる上流社會の運動少き人、禪家の僧侶の如く魚肉を食せざる人及び美食せずして、醎味の薄き飲食を資る人に在りては、低温の入浴をなし、之に反して下等社會の人は

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

概して高温多度の入浴を好むは、發汗脱鹽の必要多ければなり。

◎關東より大阪中國及び鎭西に至る沿海地の各城市には、蒸風呂、石風呂なるもの古來是れありて、其西するに從ひ、漸々多きを加ふ。そは其地形上、住民の發汗脱鹽して、身躰の健全を計るの必要より起れるものなり。石風呂は昔弘法大師が安藝の嚴島に創設せしを以て嚆矢となすとぞ。大師は沿海魚鹽地人民の必要を慮りしが爲めならん。

◎脱鹽法には加里鹽を有する品類を要するものにして、我邦にて産婦が分娩後及び痔疾に干菜の腰湯を爲すが如きこれなり、また古來の年中行事にて五月五日の節句に菖蒲湯の事あるは、氣温の高まり、悪疫の發生する時期に先んじ、故らに加里鹽の多き食鹽の最も少き菖蒲を煎出し。所謂菖蒲湯となして、之に入浴すれば、干菜湯に於けるが如くに温和なる化學的の作用に藉り、常浴以て脱し難き過分の食鹽を脱出して、爰に邪氣拂ひ暑氣拂ひの効ありて、時候柄の疾病を未發に防ぐとを得べし。されば菖蒲湯なるものは、單に無用の古例に非ずして、たゞ五月節句のみに限らず、其時季前後時々行ふべきものなり。

◎越後の人が、土用中にトクダミの湯を立つるも、其効用は菖蒲湯に同じ。この他桃葉湯、柚湯、橙湯、石菖湯等の如きは暑氣拂ひとなり、汗疹、濕疹の藥となるは、加里鹽の化學的作用によりて、發汗脱鹽の良能あるが故なり。

◎白粉を多用する俳優は、毎日二三回の入浴も毛孔に入りて白粉は充分に脱除し難きを以て、其社會の習俗にては、十五日或は二十日目毎に、在浴中七八寸許の大根を卸して嚥下するとあり。されば、其浴湯は白く濁りて、白粉盡く落つとぞ。こは白粉中の鉛分は、膩脂と共に大根の加里に化合して脱出するが故なり。

◎黴毒または癩病の患者が、通常人の入浴し難き程の高温の温泉(草津温泉または群馬縣榛名郡のガラメキ温泉)に入浴して治療するとあり。こは入浴脱鹽法の療法を行ふに外ならざるなり。また糠の油は頑癬に特効あり。

◎感冒、熱病は充分に發汗さすれば治癒することあるは、これまた脱鹽法を行ふが故なり。感冒に生姜湯、生姜酒、葱雑炊、韮雑炊などを食して、蒲團を被りて發汗療法をなすも亦

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

此理なり。

◎清國盛京省の魚鹽地たる金州及貔子窩地方の勞働者等は、其身躰最も不乾清にして、數月間の入浴をなさず、特に婦女子は生涯全身浴をなさゞるも、恬として不快の感を抱かざるは、一見不潔を介意せざる習慣によるもの丶如くに思はるれども、其實彼等は穀食動物たる天性を守りて、加里鹽の多き玉蜀黍、蜀黍、粟、糯米、小豆等より調製せる食品に、更に加里鹽の多き生葱、生韮の如きものを副へて主食し、魚肉、猪肉の類も、本邦の五色酢、天麩羅蕎麥の如くに調製して、其肉量また極めて尠く、且つ鹽氣薄きより、從つて躰內に食鹽の過剩を來すとなければ、自然に入浴するの必要は尠きなり。されば食鹽を多用せざれば入浴するの必要も無きもの丶如し。

◎凡俗の人、瘧落しの咒とて、病者が暗夜丑滿時に、人家はづれの道祖神、馬頭觀音、石地藏等に詣で丶、草履、或は草鞋の半足を奉納して歸れば奇効ありといひ傳ふるとあり。こはもと迷信より起りたるものなれども、强ちに排すべきものに非ず。この內道理ありて存す。何となれば暗夜、人靜りてさらでだに、氣持よからざる場所に至るには、既に胸中十分の怖氣あり、加ふるに、希望より生ずる勇氣ありて、冷汗を流しつ丶逸走し、また多くは歸來數椀の濃き番茶を飲み寢に就きては蒲團を被るより、逸走の發汗と、保温の發汗と兼ね備はりて、良好の脱鹽法となる。瘧のこれが爲めに癒することもあるべき筈なり。俗習とて强ちに笑ふべからざると如此き事あり。

○白隱禪師が身躰の不勝不達者にて何とも名狀すべからざる不快の氣分なるときは、先づ心を丹田に据ゑ、鼻口を閉ぢて息を凝らし、而して躰肉の邪氣を排はんものと、力み、氣を張りて身躰を膨脹すると、毎日朝夕之を行へば、八万四千の毛孔より惡氣出で丶無病長生を遂ぐるといへるも、之れまた脱鹽の一法なり。

* * * * * *

○○附記

本論の主張者石塚氏任を帶びて、大阪軍營に在るの際、夫婦アルカリ營養說を唱導して、穀菜主食を道ふや、之を贊して、同地に雙鹽會なるもの起り、有志の之に加入するもの多し。同氏また同會の爲めに食養法の道歌を詠ずるあり。近時氏特に之を本誌に寄せらる。その本說に補ふ處多きを以て、次に揭ぐ。

◉雙鹽會食養法の道歌

白歯持つ人は粒くふ動物よ肉や野菜は心してくへ
島國の魚と鹽とに富む土地は山や畠に生ふる物くへ
國人や爹と奪とに育つならつとめて喰らへ鳥とけだもの
鹽風の吹き入ろ土地は身の爲めにくらふて欲しき豆と野菜を
魚や鹽得ろによしなき山里は鳥けたものゝ肉を喰ふ可し
山里は鹽の漬物喰ふがよし肉と魚との代りするなり
牛と魚鳥や玉子と變れども海鹽と同じ物とこそ知れ
料理には畠の物に海の物肉も野菜と合ふて味よし
春から味夏は酢のもの秋もまた冬は脊と心してくへ

○蔬食者の美食家と成りしを見て

肉喰へは痩せたろ人も太くなり身は健かに智も才もあり
いつまでも肉と魚との過ぎぬれば命ちゞむろ弱身とぞなる

○都會贅澤家兒童の成人するを見て

肉喰へば干物の如く身はしまり色黒くして病がちなり
肉喰へば命ばかりか身も智惠も短くなりて才のみ多し
肉喰へば䏶の氣目やあらくなり暑さ弱りに冬亦弱り
肉喰へば心强きも氣はつまり長き仕事を嫌ふなろべし
肉喰へば短き人の多かりき氣ばかりかちて智惠は少なし
肉喰へば畑物すかぬ人となり薬くと賴むをかしさ
肉喰へば赤子の體肥ふとり育ちあぐろも病がちなり
肉喰へば一時の力多かりき䏶はつひに長生もせず

○慈鎭和尙の歌

山家には山家育ちの餌もあり味あしくとも命ながくて

○古歌に

一生の守り本尊たづぬれは朝夕たべろ飯と汁なり

明治三十年五月　　　　弦齋

史傳

白知教育の開祖　エドワード、セグイン
(EDOUARD O. SEGUIN, M.D.)

櫻井鷗村　記

離婁の明、師曠が聰、宰我の辯、如斯きは人の必ずしも冀ふ所に非ず。されど曾〻受け難き人身を此世に受けたるに、哀れや生れ乍にして、目に天日を拜すると能はず、耳に聲音を別つと能はず、口に情思を述ぶると能はざらんは、之をしも甚大の不幸と云ずして可ならんや。盲聾啞の三ツの者は、天下の頗る不幸なるものなり。然れども世には彼等よりも更に不幸の甚しきものあり、所謂白知の徒是なり。彼等も同く人身を受けて生る、されど彼等は万物の長たる靈神を享くる能はざるものか、癡愚不靈、蠢々として生死す。智慧は人の研くを欲する處、されど白知の徒や全く之を欠いで、更に智なし。情念は人の饒ならんとを欲する處、されど彼等は更に之を知らず。哀むべし、彼等は生るゝより死するに至

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

るまで、父母の慈情をだに解すると能はず、徒らに双親をして悲痛禁ぜざらしむ。父母はたゞ子の病是れ憂ふと、然るに何等前世の罪業の應報する處か、子を生まば當に玉の如くなるべしと、神かけて願ぎにしものを、思ひきや、設けし其兒の先天にして白知たるあり、或は幸に多望多福に生れ落ちにしも、一朝の病魔に忽ち變じて不靈となるあらば、双親の悲歎、夫れ那計ぞや。假令父母の一眼一肢を値ひするとも、彼兒の、聊か、此堪へ難き親の歎きを曉るに至るとあれかしと冀ふらん。我兒よ息災延命なれかしと祈るは、親の眞情なれども、白知を子としては、之を愛するの甚しきが故に、寧ろ其死一日も速かにして、他の嘲となり、祖先の家名を傷くるを勿れかしと願ふに至る。吁痛ましいかな、白知の徒、彼等は人にして禽獸の智を羨むべきものなり。而も更に痛ましい哉、彼等は曾て己の不幸と他の悲痛とを解するとなし。

抑もかの鰥寡孤獨不具癈疾のものたるや、其者の不幸は啻ふるにものなしと雖も、亦彼等の存するは、たま〳〵以て人をして怵惕惻隱の端より入りて、慈悲仁愛の徳に進ましむるの徑となれり。慈善の事は古へよりこれあり、されど鰥寡孤獨を恤むを以て爲政第一事となしたりける昔の聖人も、未だ盲唖を敎へ、白知を醫するの術あらざりき。人はいはく十九世紀は實利の世なり、澆季の時なりと。されどまた此時は、仁義博愛の道大に開けたるの時に非ずや。イブルツンの村夫子が、普通敎育の大福音は千載の賜なり。而してまた古來敎ふるに術なしとして多くは委棄せられたる、生來の盲唖も智德の天賚を拜するを得るに至るの敎育は、アーウエー(Haüy) デーラペー (del' Epee) セカー (Sicard) 等の博愛の志によりて、十八世の末葉より、今世紀の初期に亘りて其萠芽を佛國に發するあり、今や万邦至る處、其恩に感ずるの盲唖また尠からず。近くは米國に生れし、ヘレン、ケレルといへる盲且唖又聾なる一少才女が、不思議なる敎育の力に開發せられて、其智能は今正に歐米の耳目を驚駭しつゝあるに非ずや。誰か文明の世奇跡なしといふ、如斯きは洵に現代の奇跡なり。されどまた爰に之にも勝して、更に驚くべきの奇跡あり、白知の敎育これなり。白知敎育は、博愛義俠の一人傑、エドワード、セグインによりて、其途はじめて備はる。』

爰に白知なるものあり、世は其員數に乏しからず、彼等は

人の中にて最も哀れむべきものなり。彼等は遂に醫すべからざる乎。白知を救療せんとは無用の勞なりとは、多くの學者の信ずる所なりき。されど古來往々にして白知の敎育を企てゝ、失敗に了りしもの多き中にも、また時に奇怪の功を奏せしものなきに非ず。祐天和尚は本朝高僧傳中の一人なり、然るに此人其幼なるや病魔の侵す處となりて、爲めに蠢愚白知の兒となり了りしに、其師檀通和尚の熱誠なる敎育は、先の白知兒を化して、後の明敏高德の英僧たらしめたりと傳へ、西洋の敎育書中にも間々、其昔之れに成効したる敎育家の美蹟を錄するものなきに非ず。然るに、當世紀の中葉に於て、エドワード、セグイン出でゝ一生身を白知の敎育に奉じ、彼等敎へ難く、醫し難きに非ずと確信し、また自ら着々實効を世に示して、且つ此特殊敎育の組織方法を創唱するに及んで、初めて、舊來の謬見は打破せられ、彼不幸の徒の、常人に伍するを得べきの道は、爰に廣開せられたり。

エドワード、オー、セグインは一千八百十二年（我文化九年に當る）一月二日を以て、佛蘭西國チエーヴル州クラームセー市に生る。其家は世々醫を業として、皆國手を以て聞えたり。セグイン系統を此名家の後に紹ぎ、少にして既に鵬の志あり。業をオーザー大學に受け、進んでパリー大學に學び、之を了へて後醫學の研鑽に從事せり。當時令聞高かりし外科醫エタール幷に有名なる心理學者にして且つ精神病學者なるエスクロルの指敎を仰いで多く得る處あり、俊才篤學を以て同輩に秀で、また頗る師友に愛重せらる。頃しも十九世紀の初端、科學の研究漸く熾んにして、多くの學者は新智識を收めんとに忙がはしかりしかば、セグインも亦此潮勢に乘じて、心理學上の新問題を考究せんとし、特に醫すべからざるものとして神も人も久しく見放したる白知者の心理生理を研究し、之を敎育すべき組織を發見せんとしたり。これぞ此偉人が四十有餘年の間、一身を犧牲となして、白知敎育に奉ずるの端緒なりける。

セグインの心理研究に盡瘁するに至りたるもの、其師エタールに負ふ處尠からず。エタールまた白知敎育に心を用ゐ、當時「アーベロンの蠻奴」と呼ばれたる一人の白知青年ありしが、エタールは此者を敎育せんが爲めに、幾多の工夫を凝らし、種々の經驗を積みしも、思はしき成蹟もなかりけり。然

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

るにセグインは其師の失敗の研究の跡を推考し、精慮に熱意を籠め、遂に先人未發の見識を立てゝ、

白痴は腦髓もしくは神經の組織の不完全または畸形に由來するものに非ず。却て生前もしくは生後に於て種々の原因よりして、心念の發育を妨遏せられたるものなり。此心念發育の妨遏は、適當なる訓練の効によりて之を打破し得べく、以て白知者をして、假令高尚なる智識を得せしめ難からんも、なほよく通常人の生涯を送り、彼等の社會に列することを得せしむべし。

との斷案を下し、而して此心念發育妨遏の恢復は、心を用ゐて白知兒の諸官能を訓練することによりて成就すべしと信じたり、彼は實に此方針に出でゝ成効を奏したるものなりき。されば後年其白知教育を呼んで、生理的教育といひ、其學校に稱するに生理的學校の名を以てしたる所以亦爰に在り。

これぞ實に先人未だ達せざるの新說にして、當時出版せられたる著名の一醫學書さへ、なほ白知は心的官能の効力を失ひ殆ど全く腦髓の機能の力を滅したるものなり。白知は遂に醫し難し、もし彼等に知識を與へんと欲せば、先づ其官能の構造を一變せざるべからず。在來の官能は到底如何ともなし難きものなりとの說を主張したるに、此時既にセグインの一青年醫家の身を以て、此創見を立てたるもの、蓋し彼が非凡の天才に由らずんばあらず。十七世紀に於けるヴァンサン、デー、ポールを始めとし、以來多くの篤志教育家が、白知の教育を企てゝ成効せざりし所以の理は、今やセグイン一たび其說を唱へて、明々地に之を說解せり。エタール此說を聞いて、之に服せしや否やを知らず。されどエスクロルは頗る之を喜んで、爲めにセグインを紹介して、パリー郊外のベセートル養育院に於て、親しく院内多數の白知兒に就いて、之を教育し、自說立證の研究を積むの便宜を得せしめたり。一千八百三十八年に及んでは、エスクロル、セグイン兩人の名を以て一小冊子を出版せり。これぞセグインが白知教育說を世に公にするの初めなりける。時に年二十六歲、名聲既に學界に高し。

此時早くセグインは自家の天職の白知教育にあるを信じて、身を挺して之に任じ、研究また研究、熱心に忍耐を加へ、此間の研究全く自費を以て支へ、醫業幷に文筆によりて得た

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

る收入を以て自己並に白知生徒をも給したり。セグインは當時パリーの一大新聞に美術批評家として審美の眼識を開き、また雄渾誠大の筆を揮つて、政治經濟問題を論議すると既に數年なりき。其後、當時パリーにて、レルー、ブロン、レノー及びヴイクトル、ユーゴー等錚々たる文士の組織せる協會に加盟して、共に、サン、シモン系統の哲學及び經濟學を奉じて、最大多數の最大幸福を以て主義となし、共和政府を以て無上の良政府と信じたり。セグインは此等の文士と、文を競べ、説を鬪はして、最年少者なりしにも拘らず、頗る他の重んずる處となりき。

セグインのなす所如斯く多岐に入りたれども、彼は白知教育を以て天職とするものなり。彼は日一日も其研鑽を怠たらず、腦漿を絞り、財嚢を倒にして、經營慘憺爰に六七年、千八百四十四年に及んで、研究の成績は二三の著述となりて現れたり。爰に於て彼自ら進んでパリー理學會院に向つて、委員を擧げて、其成果を批評審査せんとを請へり。會院は此請を容れて、當時有名の學者數人を擧げて審査委員となして之を檢定せしめしに、委員等は熱心にセグインの白知教育法を批判論究せし餘、大に之を賞贊して、會院に報告したり。此報告一たび世に傳はるや、多くの耳目は忽ち是が爲めに動き、これよりして內外の敎育者慈善家等、續々來りて、彼が白知學校を參觀し、其敎育法を實驗して歸るもの尠からず。久しからずして、英國及び大陸諸邦に數多の白知學校の設立せらるゝに至りき。セグインはこの成績を以て滿心するとなく、研究更に二年にして、其白知敎育學の名著を成したり。此書出版せらるゝや理學會院は之に贊評を與へ、時の羅馬法皇パイアス第九世は亦謝辭を寄せたり。廣く世に行はれては、歐米各國の白知學校の基礎をなし、米國最初の白知學校なるシラキユースの實驗學校の如きも、實に其創立者ウイルバアの此書に感奮して設立したるものなりけり。

然るに當時の佛國は政弊多端にして、遂に千八百四十八年の革命の亂となりしが、鋭剛にして俠氣に富めるセグインは、此狀勢を見て安んずると能はず、入りては蠢愚の白知兒を友として諄々之を敎へ、出でゝは共和黨に伍して政界に馳驅したりしも、黨運拙く、ナポレオン第三世、遂に帝號を稱せり。然るに彼ナポレオンや其未だ志を得ざるに當りては、

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

セグイン等同志の徒と共に、共和政治を唱導したる者なりしも、一旦其野望を遂ぐるや、飜つて曩時の政友を迫害せり。爰に於てセグインは本國に在りては、到底思想行爲の自由を得るヿ難きを見て、千八百五十年、決然、悲涙を呑んで、其祖國と其學校とに辭し、妻子を携へて、米國に移住し、遂に長く此自由鄕の民となれり。セグイン一たび足を擧げて、白知敎育の祖國は亦米國に轉じ、今日白知敎育をいふもの、模範を此國に仰がざるを得ざるに至れり。

其米國に移住するや、直に諸方の白知學校を巡察して、益を與へ、特にシラキユースなる學校にてウイルバアを補助するヿ千八百五十四年以後三年に亘れり。亦二三の同種學校創設に力を副へ、また暫くはペンシルバニアの新設學校を總理したり。千八百六十年居をマウント、ヴエルノンに定めしが、後三年にして、ニユーヨークに移り、兩所乍らに醫術を開業せしに、其治術の妙を慕ふて、諸方の患者集り來り、爲に繁忙を極めしも、其胸底は白知の歎きに絕えず騷ぎ、忙中閑を偸んで、米國白知敎育界の進歩を觀察し、又歐洲諸國同界と氣脈を通じ、且自ら之が爲めに企圖する處あり、此際また普通兒童の敎育上に其生理的敎育法を施さんヿを計りたり、此外時々白知敎育上の著述を出版したるもの其數多し。セグインまた醫術に貢獻する處尠からず、其新案躰温器の發明の如きも其中の一なり。

如斯くにして彼は多年、躬ら白知敎育の事業に任ずるヿ能はず、加ふるに其夫人多病なりしを以て轉地の爲、兩三回佛國に歸りし事あり、爲めに折角の計畫も屢阻碍せらるゝヿありしと雖も、セグインは一瞬時も、克く此博愛慈善の大事業を忘るゝものに非ず。既にして彼其妻に先ちて幽界の客となり、彼また老す。老いて志ます／＼固く、千八百七十六年同志と計りて、白知學校監督者の協會を結びて、擧げられて、第一の會長となれり。後二年即ち千八百七十八年に及んで、自らニユーヨークに一學校を創立し、白知の敎育と共に之が敎育者幷に保姆たるべきものを養成するに至れり。これぞ即ち現今のセグイン生理的學校の起原なり。セグインおもへらく、白知兒は個々別々敎育するを以て多くの功を奏すべく、多數一時の敎育は、勞多くして却て功尠しと。彼の曩に佛國に在りて、此事業を始むるや、白知兒百人中七十五乃至八十

は教養して尋常人間に恢復せしめ得べしと信ぜしに、爾後諸地の學校の成績未だ其心を滿たすこと能はず、組織最も整頓せる米國の學校にてすら、比較的健全多望なる白知見にて、尋常人並に教育せられしもの、やうやう百人中五十の比あるに過ぎざるを見て、爰に於て乎、個々別々の教育法を以て最良策と認めたるが故に、その新設せる學校も、初めは僅に一人の白知見を以て開きたり。この見もと多く望を屬すべきものに非らざりしも、教育の力は不思議の成効を奏したるを見て、更に二人に增し、また三人となしたり。而して當時彼の最も苦心したりしものは、よく此不靈者の教育の任に堪ふべき教師を獲んことにて在りき。聞說、今日米國諸方の白知學校にて、其初め、此事業の光榮を羨んで、或は教師、或は保姆の志願をなすもの尠からずと雖も、彼情なく智なく、多くは耳鈍に口澁り、また四肢の能を欠ぐものあり、また頑狂にして制をなし難きものあり、且つ多くは癲癇性なる此等人間界の最醜類の保育看護に當りては、氣先づ萎え、隨つて志屈して、爰に二年の忍耐を遂ぐるもの至りて稀れなりといふ。彼セグイン、其志操は水火の威し得る處に非らざりしも、老年既に來りし身の、那計り適任の助手を求むるに煩ひけん、然るに幸なるかな、一年少婦人の、彼が大業と其高德とを慕ひて、助手たらんことを欲する者あり。此婦人は博愛の志厚く、百難に耐ふるの氣慨あり、孜々セグインを助くること二年にして、終に其繼聘となる。セグイン爰に其遺業を傳ふべきものを得たり、彼今や大に安んずる處ありしが爲か、質性元より强健なるに非ずして、志望の故に張り詰し、梓の弓の弦や弛みけん、世上の人々、冀くは此義人いつまでも生き永らへよと思ひしことも空賴み、百年偕老の此世の契りは、僅に六ケ月にして絕え、千八百八十年十月（明治十三年）劇性の赤痢病に罹りて、二週間の療養、醫藥其効を奏せず、其二十八日、此白知者の大恩惠者は、世界には其大功業を紀念とし、其最愛の妻には、幼稚なる學校を唯一の遺產として、子息の家に在りて溘焉平和なる永眠を遂げたり時に年六十九。彼は其死に至るも、其天職をやめず、病革るや、夫人は數日學校を閉ぢて、看護を盡くさんことを請ひしに、忽ち病に弱る聲のあらん限りに叫びて、否、否、一時間たりとも、小兒の監督を忽にすべからず。

これ最も必要なることなり。
と答へて、毫も其言を容れず、夫人も止むことを得ずして、遂に彼が死に至るまで、一日も、當時在校三生徒の教育を廢することなく、たゞ僅に葬儀の當日のみ休校したりとぞ。而して其月の上旬、セグイン自らも、死期既に邇きに在るを暗知せしものなるか、自校の爲めに、不易の學則を立てゝ、夫人への遺戒とはなしけり。

セグイン質性博愛にして、義俠なり。人の己を誹謗するものありとも、曾て憤怒せず。されど人もし其友人に害を加へんとすることあらば、毫も假借する處なく、力を盡くして、其友の爲めに敵を追へり。彼が、人間中の最不幸者の爲めに四十餘年の生涯を奉じたる所以、正に此美質の動機に由來せずんばあらず。また無私無欲にして、敢て虚榮を求めず、富貴を貪らず、あらゆる財産は之を其事業の爲めに蕩盡して殘す處なし。其堅忍不拔の精神を有せしこと、今更いふを俟たざれども、其一端を擧ぐれば、人あり曾て、彼の一白知を教育するを見て、『何故に百度迄も繰返して同一事を敎へ給ふや』との問をかけしに、答へて『そは此兒は九十九返までは、正當に學び得ぬなれば』といひて温容少しも變ずる處なかりしとぞ。この忍耐ありて、彼は其鴻業を成就せり。

由來天才多能なり。セグインは本業の傍、兼て美術の品評を能くし、佛文學は更なり、英米幷に歐洲諸國の文學に通じ、また古文學に達せり。年少既に詩人の名を成し、且つ文辭に長ず、其英文は多少欠點なきに非ざれども、其佛文は頗る見るべきものありといふ。また曾て政壇に立つては一方の雄たり。概するに其識見深遠にして哲理思想に富めり。其白知教育に關する十餘種の著書の如きは、今日なほ斯學者必須の寶典にして、後人未だ能く之と競ふに足るものを出さず。其宗敎に對するや、無神論を執るものに非ざりしも、凡て何等の宗派にも屬せず、宗敎上の說理幷に儀式に於て服する處なし。されば其葬儀の如きも、子息、亡父の志を躰して、全然宗敎的儀式を用ゐざりしといふ。

未亡人エルシー、エム、セグイン、また能く亡夫の遺業を紹いで、斯業に精勵し、年少所天を喪つてより十有七年、數多の白知兒を以て、唯一の慰みとなし、事業以外殆ど己れあるを知らざるものゝ如し。其十一年の長日月中、校舍を外に

したると、僅に四回夜あるのみなりといふ。以て其烈志を知るべし。此底の烈志あり、豈に應報する處なからんや。夫人常に先人の敎則を墨守して、一時に多數の生徒を養ふとなきを以て規模また小なりと雖も、其成績は幾多の米國白知學校中の最上に位して、頗る推重せらる。同校は始めニユーヨークに在りしも、其地多鹽の海風の生徒等の健康に適せざるを以て千八百九十四年、新に校舍をニユーゼルセー州オレンジに建設して、之に移轉し、また曩には單に通學學校なりしも今は完全なる寄宿學校となりたり。

爰に人の中にて最も大なる、此白知者の大恩人の一生を學び來りて、更に卷頭掲ぐる處の小照を拜するに、其眉宇の間に靄然たる慈愛温厚の德容、轉た我等に逼り來らんとするものの如し。之を思ひまた彼を思ふて、吾人はエドワード、セグインの鴻業偉德を欽して、意燃え情熱す。吁大なる哉、此人の事業。これぞ洵に當世紀の最大事業の一と稱すべく、其最大不思議の効驗は人をして驚嘆措く能はざらしめ、歐米諸國の幾多の白知學校は、皆此セグインが功業の紀念碑として、寔に天下の奇觀を成せり。彼を古今の敎育史中に列すれば、コメニアス、ペスタロチー等の先聖前賢と相肩比すべく、而して其恩德を感謝するもの、たゞに白知者及び其父母のみに非ず。此特殊敎育の効果、必ずや將來の普通敎育をして、更に雄大の進步を加へしむるものあるに於ては、天下相率ゐて、此偉人の功德を謳歌せずんばあらざるなり。

既に筆を擱かんとして、更に思ふ、此セグインの偉業を我邦に紹がんとするもの、今亮一大須賀氏あり。氏は百難を排して、將に我國に白知敎育の根柢を置かんとす。冀くはセグインの英靈、冥々の裡に、此人を指導せんことを。又乞ふ博愛義俠に富める天下の士女、志を寄せて、大須賀氏が熱誠獻身の事業を顧みんことを。

エドワード、セグイン以下多數の白知敎育家が、博愛、忍耐且つ鋭意精勵によりて奏功したる、多くの成績は、不思議といふも愚にて、その奇異なると、彼盲啞才女ヘレン、ケレルの敎育に於けるよりも更に大に驚くべきものあり。其實例に至りては、須く爾後本誌に於て紹介せんとするものを見るべし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

文藝

文雅のたしなみ

長汀子

文武其歸する處一、諸藝諸能千種万別にして、道は一、其一を極むれば、即ち心を錬り、道を修すると備はる。一能一藝に熟達したる程の人は、人品思想ともに何となく奥ゆかしきものなり。されば凡そ人は、敢て多藝多能を要せざれども、何卒、一能もしくは一藝を心掛て、道の妙を曉る底の域にまでも入りたきものぞかし。藝能を以て世業をなすべしとにはあらず、何等の本業の傍にも、餘力以て文を學ぶとあらんとこそ、最も願はしけれ。

藝能より入りて道の妙を悟る程の熟達は、人の天稟によりては、一世一代をかけても六ケ敷き事なれども、凡そ一文一藝に心掛淺からざるものは、心自から文雅なり。この文雅の品質は、男女を問はず、誰にもあらまほしきものにして、單に剛强なるは、士の貴ぶ處に非ず、偏に柔順なるは女の宜しき處に非ず。古人もいはく、武士の片向に强き計りにては、何とやらん農人上りの武士を見るやうにて然るべからずと。古今の名將勇士の中には、歌を詠じ、樂を嗜むもの尠からず、其剛勇よく文雅を兼ね、武にして亦文なる處は、後世より考へても奥床きと慕はしく、而して千載に香しき名を立つるほどの人は概ね斯樣に文武兩道の人なればこそなれ。彼の猪勇の輩、毫も文なきは、蓋し云ふに足らざるものゝみ。

西洋の政治家また理學者などが、兼ねて文學技藝の名を成せる例いと尠からず。其故は、たゞに本業にのみ、齷齪たらずして、時々に全く其心を轉じて、他の高尚なる文藝を修め、以て、腦力を多樣に働かすとによりて、更に本分を盡くすの力を增さんが爲めなり。本業の外に、何か慰みなくんばあらずとは、多くの人の唱ふる處なれども今日我國社會に紳士を以て稱せらるゝものゝ如きは、多くは文藝の心掛なく、隨つて文雅の品質なし。たま〳〵に所謂慰みとする處を探ぐれば卑野陋劣のもの多くして、以て其精神を養ふの資となるとなし。之を西洋の紳士の文雅のたしなみあるに比すれば、およ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

はざると万々にして、實に、百姓上りのものを見るやうなり。

文雅のたしなみなき人ほど乾燥無味なるはなし。されば詩歌文章、俳諧、茶の湯、生花、繪畫、彫刻、その何れにてもよし、一二を撰んで、餘力以て之を學ぶべし。また之を味ひ得るの智識を求むべし。學問なるものは、素より人品を高うするものなれども、之と共に文藝の趣味を解せざれば、其學者の精神は枯木冷灰同様なり。つまり其學問も死學問なり。凡そ詩想美想なきものは以ていふに足らざるなり。

詩想美想は、人をして文雅ならしむるものなれば、男子は之を以て、其剛强を磨くべく、女子は之を以て其柔順を飾るべし。男子は世に處し、人に接し、業を勵むの際、文雅の精神は、悠々逼まらざるの氣となりて、事に應じて圓滑なるべくよりて成効の因となると尠からず。女子の職分は多くは單調なり、其家庭に於ける諸多の業務は、中々に乾燥なるものなれども、此人にして文藝の心得あらば、能く此乾燥の事柄に處して、之を調味し、其文雅のたしなみは、擧動進退の閑雅となり、夫に事へ、子を養ひ、比隣に交はるの上に補益すると多し。故に人として世に處するに文雅の質なかるべからず、之を得るの道は文藝に在り。然りと雖も、彼の文に荒み、藝に僻するに至りては、其弊に陥るものにして之を避くべく、特に餘力以て文雅のたしなみを得んとするものゝ最も心すべきものなり。

評釋 砧の聲

曲浦子

秋風の荻の葉をさそひ、葛をうらがへす空となりては、をりからの景色は、その秋風はもとより、月のかげいとよく澄み上りたる、友まつむしの音、ふりすてがたき鈴虫の聲、つゞりさせてふきり／＼すの鳴く、いづれ哀れならざるはなく、分けても、夜寒の砧、月にきこえあげて、賤の伏屋に打つ、磯の松風寂しさそへて、海士が苫屋にしきる、古への歌人は、これが爲めに、幾許かその膓を絞りけん、詩に歌に、詠嘆の幽情を洩したる、いと多かり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

松風の音だに秋はさびしきに　　俊頼
ころもうつなり玉川の里

夜を寒みねざめてきけば長月の　　實朝
ありあけの月に衣うつなり

などあるもあはれならずや。

砧打つて我にきかせよ坊が妻　　ばせを

といふも、多恨の詩人の寂しさを味はんとてなり。清水の濱臣がきぬたをきて、、

近しと聞けばとほし、遠しときけば近し。ふろきもたゆみ、たゆむも亦しきろ。雁がれの聲のきぬたをさそふにやあらん。砧のかりがれに通ふにやあらん、あなあやし、あなあやし。そもく此おとのかなしきか、住さとのさびしきか。打つなりのうき故か、皆あらず、聞く人の心のさびしきなり。

その詞を書ける、さながらに、その寂しくかなしきを聞く心地ぞする。唐の詩人が、春江花月の夜にあたりて、

玉戸簾中捲不去、擣衣砧上拂還來

と吟じたる、こは秋ならねども、朧月夜に打つや砧の哀れは流石にきこえたり。擣衣の寂しきを歌へる、古來いと多かれども、之につきては、われ等はまづ、謠曲『砧』の中なる、閨怨の佳人が月明の夜に當りて、

唐土に蘇武といひし人、胡國とやらんに、捨ておかれしに、故郷にとゞめおきし妻や子、夜寒の寐覺を思ひやり、高樓にのぼつて砧を擣つ。志の末通りけるか、萬里の外なる蘇武が旅寐に、故郷の砧聞えしとなり、妾も思ひや慰むと

とても寂しき暮はとり、綾の衣を砧にうちて、其綿々嫋々の恨みを訴へたるあたりの文字を呼び來らずんばあらず。その躰は散文の形したれども、こは洵に美しき抒情の詩なり、悲趣頗る多く、之を吟ずれば、また轉た長嘆せずんばあらず。いで其抒情の一篇を味はんか。

◎衣に落つる松の聲、衣に落ちて松の聲、夜寒を風や知らすらん。音づれのまれなる中の秋風に、憂きを知らする夕べかな。

秋風まづ軒端に松籟の調べとなりて、さゞんざの聲、衣手にしみて、夜は寒し。此句其景を叙して妙、こゝに初二句の僅に現在と過去との調をあやなすのみにて餘情したゝかなるは巧手の業。人去りて歸らず、吾れや秋の扇と捨てられて、音づるものはたゞ秋風の、身にしみ渡る夕べの空、さらでもの憂きを催して、恨益〻深し。

◎遠里人も眺むらん、誰が世と月はよも訪はじ。面白の折からや、頃しも秋の夕つかた、牡鹿の聲も心すごく、見ぬ秋風を送り來て、梢はいづれ一葉ちる、空すざましき月影の、軒の忍草にうつろひて、露の玉垂かゝる身の、思ひをのぶる夜すがらかな。

空を仰げば月皎々、思ふに我夫も万里の外に、今宵之を眛むらん。されど月は吾を訪ひて慰めを與へじ。吾が世は人に捨てられし身ぞ。そも月に恨むか、いな夫を恨むなり。秋の夕の空の景色のゆかしきは一方ならず、頃しも妻こふさを

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

鹿の聲、あはれに悲しきは、目にこそ見えれ山風のいさゞ夜寒を傳ふなり。されど此時しも妻を顧ざるの夫はあり。落葉一片、風に飄れば、仰いでいづれの梢より散りしかを思へば、また中天の月影、其影やゝさびしく、光軒端の忍ぶ草に映して、露の玉を懸けたり。軒の忍ぶ草か、心の忍ぶ思ひか、いたく忍べばなりから月光また情を催して、涙の露の玉だれ袖にかゝる此身、吁徹宵、恨思盡きず。

◎宮漏高く立ちて風北にめぐり、隣砧ゆるく急にして、月西に流る。蘇武が旅寢は北の國、是は東の空なれば、西より來る秋の風の、吹き送れと、まどほの衣うたうよ。

時に古人の詩歌を誦し來りて、我藥籠中のものなさすは、謠曲文の一妙。思ふ昔蘇武は北胡國に流涙せしに、故郷の妻や子が擣つ砧の聲の、身にしみしといへば、南より吹く風にや擣ちけん。されど人は今、去りて東に在り。さればよ、折からの秋風は、西より吹き來るはよし、この秋風に、荒妙の間遠の衣いざ擣たば、東の空の夫の旅寐の耳にいるともやあらん。情間遠の恨みの末の適ひもしなんに。

◎故郷の軒端の松も心せよ。おのが枝々に、嵐の音を殘すなよ。今の砧の聲そへて、君がそなたに吹けや風、餘りに吹きて松風よ、わが心、通ひて人に見ゆならば、其夢を破るな。破れて後は此衣、誰が來ても訪ふべき、來て訪ふならばいつまでも、衣は裁ちも替へなん。夏衣うすき契りは忌まはしや君が命は、長き夜の、月にはとても寢られぬに、いざ〳〵衣うたうよ。

擣衣砧上、聲しきるまゝに、情いよ〳〵逼まりて、志ます〳〵激する調、文字に遺憾なし。軒端の松風、砧の音、亦いさ寂し。松が枝々よ、嵐の音をさめなかでその松風に擣衣の音を傳へ〳〵て、旅寢の夫に吹き送れ。されど松風また心せよ、わが心彼人の旅寢の夢にも通ひて見ゆるものならば、あまりに吹きて、其夢を驚かすべからず。夢は破れ、此衣またやぶれなば、誰かまた之を着ん、中破れなば、人は再び歸り來て吾を訪はじ。さはれ衣の破れたるは、再び新裁するを得んも、恨むべし、妹背の語らひ、夏の衣の薄きに似たりけるを。されど云ふ勿れ、君の命は長かれば、またの逢瀨を待つべきに、さりながら、長きさいふも、此秋の夜長の、月の光りには思の千々に亂れつゝ、さてもかくても、寢こそせられれ、いざ〳〵一夜は衣打ち明さん、思の末の東の空に通へかし。

◎彼七夕の契りには、一夜ばかりの狩衣、天の河波立ち隔て逢瀨かひなき浮舟の、梶の葉もろき露なみだ、二つの袖やしをるらん。水陰草ならば、波うちよせよ泡沫。文月七日の曉や、八月九月實にまさる長き夜、千聲万聲の憂きを人に知らせばや。

折りしも秋の事なれば、思ひぞ出づる七夕の、一年に一夜の假の契りのはかなさや。天の河波逢ふ瀨隔てゝうしやうし、うき舟の梶さろ便りあらばこそ、文かき流す梶の葉の、散りやすきごさ、散りやすさ、涙は露さふりしきり、二星の袖やしをれてゐるゝらん。我身もかくぞ今はある。我世を隔つ天の河波あるならば、水に流るゝ浮草の、夫にしあらば、波にたゞよふうたかたの誘ひて寄せよ我方に。今はたおなじ、我れ七夕の、かひなき契りうらめしや。この文月葉月長月の長き秋の夜すがらに、千聲万聲しきりに砧打ちあげて、千思万慮の胸の思ひを傳へなん。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎月の色、風のけしき、影におく霜までも、心すごき折ふしに、砧の音、夜嵐、かなしみの聲、虫の音、まじりておつる露涙ほろ〳〵、はら〳〵〳〵と、いづれ砧の音やらむ。
秋なれや、さらでだに皎々たる月色、颯々たる風聲、牀前明月光、疑是地上霜までも、折からものさびしきに、まして、我砧を打てば、夜嵐のものすごきに和し、我悲鳴を擧ぐれば、喞々たる虫聲憂を添へ、かてゝ袖にふりしく露涙の落つる。天上天下、有情非情、諸共に悲哀の聲を放つて、ほろ〳〵はら〳〵、いづれの音はた砧なる。恨みは綿々たり、万物は皆歎きの種、さりさても人のつれなきことよ。閨愁の思人、此夜、松風明月の下、無量の怨恨を砧に打ちて、終に病んで死す、この恨みあり、死して死せず、成佛の機縁を、歸來の夫に俟ちけるも、然るべきことにこそあれ。

雜録

撰集抄を讀む

蕉雨生

春風秋雨、去來すること既に六百年の昔、西行法師は、英雄偉大の天資を抱いて、刈菰と亂れ騒げる世のさまを歎き、性素と塵寰を厭ふの志深かりしものゝ、一朝の感に激して、篤も頼まつらん君に辭し、いとをしかりし妻子を棄てゝ時にし遭はゞ、王覇の業をも成すべかりし、佐藤義清の俗躰を擲ちて、憂身を捨身抖擻の姿にやつし、南船北馬、東に去り、西に過ぎ、花月のゆかりを尋ねて、放吟漫詠、三籟の聲に和唱して、孤り心をやれり。若し夫れ山家の集を吟ぜんか、西行が天地の至大に參し、四時の變移を觀じ、人生の無常を悟りて、幽玄美妙の調に發するもの、人をして、また其參せし處に參し、其觀ぜし處に觀ぜしむるものあり。而も一旦志あり、超然俗界を脱す、故に其豪邁の氣慨の、時に施すことなく、世に行ふことなきも、曾て之を怨懟するの調をなさず。夫れ世は定めなく、人は果敢なしと雖も、花の開落、月の滿缺、百年其序を變ふることなき自然界を、我心の宿と定め、終生を風雅に托して、優々自適す、豈に高士に非ずや。海舟勝先生が、古今第一等の人物、西行を推す、試みに其歌を朗唱して、其然るを知るべしといふ所以のもの、亦爰に在る歟。
西行法師が脱俗の高韻は、由來其天稟に出づと雖も、彼は一朝の發心によりて、其隱逸の志を、三寶の聖敎に委ね、之に安心立命の地を托したるもの、されば則ち此達人の宗敎心

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

を窺ひ知らんと欲せば、山家集は隱約の間に其消息を洩し、而も其漫吟は、法文偈頌として見るべきもの多し。然りと雖も、吾人は猶一層の欽仰を呈して、西行法師の道心の、那計り篤厚なりしかを學ばんと欲せば、必ずしも撰集抄一部を精讀せずんばあらず。撰集抄は西行の遺書なり。自ら其卷頭に序して曰く、

生死の長き眠いまだ醒やらで、夢にのみほだされつゝ、水の面の月を實と思ひ、鏡の內のかげを、げにとふかく思入て、あけくれは、只妄念の心のみうちつゞきて、生死の船をよそへずして、屠處のひづじの歩は、我身の外にもてはなれ、鳥部、舟岡のけぶりをよそに見て、過ぎにし方四十餘年の霜をいたゞき、行末しらず、けふしもやあるらん、しかれば同夢のうちの遊びにも、新舊の賢き跡を撰求ける事の、言の葉を書き集め、撰集抄と名付けて、座の右に置いて、一筋に智識に賴まんとなり。卷は九品の淨土に思ひつゝ、十に一をもらし、事は八十隨好に思よそへて、百に二十を殘せり。抑凡夫の習、明眼しひて、眞月を見ず、心老いて、斷妄の利劍おこたらざるものなり。されば

偏に冥助を仰ぎ奉らんが爲めに、巻毎に神明の御事をしるし載せ奉り侍り。

と、以て知るべし、此書は西行が、道心を琢き、聖教に思ひを凝して、明に眞如の影を拜まんものとの願望より、目に觸れ、耳に聞きて、心にいたく感ぜし、出家得道の美談を述べ記して、庵に在りては、其坐右に置き、旅に出でゝは、其笈に收めたるものなりけんを。されば西行法師の宗教心を學ばんとには、之に越したる便なし。

今此抄の成りし年月を考ふれば、筆を何れの頃に起せしや、定かならざれども、序には四十餘年の霜など書き、また卷尾には壽永二年正月下のゆみはりに、讚州善通寺の方丈の庵にして書き了りぬとあるを見れば、西行は初老の霜、やゝ頭に白く、家を出でゝより早くも二十餘年を過し、三寶の結縁、既に深かりし日に在りしを知るべし。夫れ壽永二年といへば、先だつ三年が程には、東國の源氏兵を擧げて蜂起し、都には相國入道みまかりしより、榮華さしもにいみじかりし平氏も惡運つきて世の末となりつゝ、此年の秋には、其一門都を落ちて、西海の波に漂ひ、次ぐ三四年が中には、先帝はじめ、平家の大臣大將、また女臈までも、

家の大臣大將、また女臈までも、敢なく海底の藻屑と消えはてたり。榮枯盛衰の劇變、古今此時を以て最も太甚しとなすべくして、かの源平盛衰記の卷々の物の哀れは、西行法師が目のあたり、之を見聞して、感情深かりし身の、日に幾度か其腸を絞ることのありつらん。されど此時にあたりて、我心の種とて、筆を撰集抄の述作に着くるや、彼と世を同じうしたる長明が、大原山の方丈に、方丈記を作りて、天災地異を怖れ、世の盛衰を歎じて、怨み且訴ふるが如きに似せず。西行既に超然として人寰を洒脱す、世變また心に關せず。大禍亂の激動を念外に委し、笻を六十餘州に曳きて、心のまゝに歌枕を尋ね、意の叶ふ處に庵を結びては、山家集を成し、先覺の垂跡に結縁しては脩行の便となし、また當時少からざる隱遁者を訪ひては、道心を砥礪するのたつきとなして、之を撰集抄に收めぬ。八十章の感話、其多くは素懷を遂げし大往生者の類、または山田のそぼつ玄賓が流の人々を擧げて、或は道心の堅固なるを聞いて感涙禁ずる能はざりし事を記し、或は事柄の殊勝なるに熱情を燃せしよしを述べ、西行が崇高の志此等の事々に動き、自ら德の短きを歎息して、彼解脱者の高德に化せられ、此得道者の信心に導かれて、一佛淨土へと乞願なしつゝ、筆は至誠に動き、文字は肺肝より出づ。西行素より見性成佛を思ふの徒に非ず。其心の底の奥までも、他力本願の功德によりて、早く頓生菩提の業を遂げなんものとの、柔和謙遜なる信心の志は、此抄の中に充ちて溢れ、之を讀むものは、自から襟を正し、膝を整へ、心の妄想を拂つて、其感話の殊勝事に感歎するは、言ふまでもなけれども、亦此等を見聞して感激動哭したる西行法師が、情の誠にして、又道心の美しきに、難有く辱なきを思ふの深きものあり。實にや此撰集抄こそは、法師が偏に他力往生を念願する爲めの文字なれば、これぞ此人の宗敎心の何れの方面に燃え立ちて、那計厚篤なりしかを知るに餘りある。更にまた人をして他力の信心を起さしむるは、或は蓮如の御文章にも優るとありといふも不可なけん。

而して又此書の文字たる、たゞに眞情より出でゝ、殊更に詞辭に勞したるものには非らざりけん。然れども西行法師の詩腸は廣大無量なり、其發しては歌となるの微妙幽玄の調べはまた此散文にも自から顯れて、撰集抄一篇無礙疏通の文字は

麗彩を流し、綿繡を織る。其白峰の御陵に詣づるの一節の如きは後世、上田秋成、曲亭馬琴等の之に摸倣するものありと雖も、情の真摯にして文の流麗なるは、之に及ぶと能はず。又其鹿島大明神の社に詣でゝ、折柄の景色を叙して、

南は海にてきはもなく侍れば、晝はみなれ棹さす舟を見。夜は波にやどかる月を見き。北は山にて侍れば杉村にをちなくほとゝぎすの初音、いちはやく聞く。草むらに露を添ふる夜の鹿、あかつきさけぶ猿の聲、みやまおろし松の風よに物あはれに心すごく侍り。東西野邊なれば、いろ〳〵の花はにしきをおほへるに似たり。扨も何よりもおもしろく侍りしは、御殿の上の櫻の七日をかぎる別れをつげて、今をさかりと、移りて侍りし。折ふし潮みちて、社のあそこに一むら、こゝに一むら、なぎさ〳〵、入江〳〵にゆられありき侍りし。

といへるは、たゞ何となしに書き流したるものなれども、山家集の中にも入れて見まほしき計の詩趣あり。此外文字の美妙なるもの、爰に擧げ盡すべきに非ず。西行も亦た文に雄なるもの歟。

吾人常に山家集を誦して、西行法師の高雅なる風骨を欽慕してやまざるもの、今又其撰集抄を繙いては、其道念の丕さに咽びなんとするばかり。古今素より隠遁の士に乏しからず、現に西行の時代は、世變無常の果敢なき事の、目のあたり多く感ぜられしとて、世を遁れて山に住む人其類尠からず、此抄既に希有殊勝の隠逸者を記するを以て滿つ。然れども勃々たる一大英雄の志を抑へて、鈴鹿山浮世に餘處になり捨てゝ他力大往生の本願を専一とし、和歌を詠じては情懐を遣り、卓然俗塵を離れ、悠然天地と共に推移すると、西行の如きもの、他亦其人ありしや否や、其跡湮滅して之を知るによしなし。されど其徳光は之を韜まんとしていよ〳〵現はれ高風百世に薫ずると、古今此人を以て最も偉なりとなす。豈に聖者といはざる可けんや。

いかでわれきよく曇らぬ身となりて
心の月のかげをみがゝん　　西行

あはれ知るなみだの露ぞこぼれける
草の庵をむすぶちぎりは

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

撰集抄ぬきほ

左に掲ぐるは西行法師諸國行脚のみぎり、みすゞかる信濃國佐野の渡りの山中にて、不圖も二人の禪僧が往生の最期に遭遇して、之を煙となし、遺骨を捧げて高野に納めたるてふ事實を記したるものなり、前出『撰集抄を讀む』この參考として、爰に示しつ。

◎禪門僧山居往生の事

永曆のすゑの八月のころ、信濃國佐野の渡を過侍りしに、花ことに面白く、むしの音こゑ〴〵になきわたりて、行すぎがたく侍りて、野邊に徘徊し侍るに玉鉾のゆきかふみちのほかに、少し草がたぶくばかりに見ゆる道あり。いかなる路にかあらんと、床しく覺えて、尋ねていたり侍るに、すゝき、かるかや、はぎ、女郎花を手折て、庵むすんで居たる僧あり、齡四十路あまり五十路にもやなりぬらんと見えたり。前にけしかる硯筆ばかりぞ侍りける。實にたつとげなる人に侍り。庵の内を見入侍れば手折て庵につくれる草々に、紙にて札を付たり。すゝきの戸には、

薄しげる秋の野風のいかならんよな〳〵むしの聲のさむけさ

又かるかやの戸には、

山陰の暮れぬとおもへばかるかやのしたおく露もまだき色かな

又ふぢばかまのふすまには、

露のぬきあだにおるてふふぢばかま秋風またで誰にかさまし

又荻の戸には、

夕さればまがきの荻に吹風の目に見ぬ秋をしるなみだかな

又女郎花のさけるには、

女郎花うゑし籬の秋の色はなほ白妙の露ぞかはらぬ

又萩の咲るには、

萩の花うつろふ庭の秋風に下葉もまたで露はちりつゝ

といづれも札を付置て座禪し給へり。ことにやさしくたつとく覺えて何わざの人ぞいづくより爰には來り給ふにやといふに、此春よりとばかりにこたへて、其後は何事をとひしかども、つひに物ものたまはざりき。さる程に日もかたぶけば、名殘はつきせねども、なく〳〵別れかへりしが、結緣をもせまほしくて、あさの衣をぬぎて、彼庵におきて出侍りき。かくて西の方へあゆみ出たれば、まをにけはしき山あり。水きよく流れて、岩の有さま見るめづらかに、繪に書くとも是にはにせじと、心とまるほどなる所なり。川の水上をたづねゆけば、一町あまり來ぬらんとおもふ程に、木の葉をさしおほひて、六十あまりにたけたる僧、いまぞかりけり。爰にも亦かゝる人やおはしけりとおもふに、むねさわぎて、急ぎよりてみれば、うるはしく座してねぶるやうにて、いきたえ給へる人なり。木の枝に紙にて札を付置たまへり、

むらさきの雲たつ身にしあらざれば澄る月をぞいつまでも見る

といふ歌の札なり。哀れにかなしく侍りて、上の聖の同行にこそと思ひて急ぎ行て、しか〴〵と云に、いとあはれにこそとて、硯引よせて紙にかくなむ、

迷ひつる心の闇を照しこし月もあやなく雲がくれけり

と書きをはりて、筆をもちながらねぶれるやうにして終はられぬ。あさましく悲しくて、袂にとり付きて、をめけどもかひぞ侍らぬ。又山陰に住み給へる人は、いかゞおはすると思ひて、なく〳〵はしり行て見れば、はや首は前にかたぶきゐ給へり。さて有べきに侍られば、煙となし奉らんと思ひて、火打ちて既にやかんとし侍りし程に、餘りにかなしうありしかば、閑居の友ともし侍らまほしくて、涙をのごひて、おろ〳〵と彼姿を繪にとゞめとりて、後にけぶりとなし奉りて、又野邊の聖の方へ行てみれば、かれも首はかたぶき給ひしかば、おなじくかたちを寫しとめて、おなじ火にてたきあげて、其夜

は野邊によもすがら念佛して、一佛淨土へと乞ひ願ひ侍りし。明ぬれば庵りの歌ともとつて、なく〳〵去侍りき。あはれたつとかりける事かな、生死心にまかせ給へりけるぞ有がたく侍る。たゞ人ならぬ禪僧なんどにておはしけるにこそ。歌さへ末世には有べしとも覺えぬ程に侍り。所から誠に心も澄むべきありさまに侍る。人里も侍らず又もちたくはゆる物も見えず。何としてしばしの程の命をもさゝへ給へりけるぞや。我世を背いて、廣く國々をへまはりしに、貴き人々あまた見しかども、かゝる人に未だあはず侍りき。扨も最後臨終にもあひ、烟ともなし奉り、骨を拾ひて高野にもよぢ上り、彼聖たちの筆の跡をもとり留、歌をも詠じ侍れば、さだめて彼二所の力にて我も淨土へみちびかれ奉らんと覺えて、嬉しく侍る。讀み置給へる歌、書置きたまへる文字、世のすゑには、たぐひ侍らじかし。

古寺

花影子

夜は更けて　月かげたかく、卒塔婆の　かげは短し。
蝙蝠の　羽音はよわく、地の上を　影ぞはひゆく。
おばしまに　蔦つたはりて、きざはしに　尾花ぞそよぐ。
軒の端を　這ひゆく風に、うち人なき　鰐口ひゞく。
須彌壇は　うへに厨子なく野狐の　臥床となりぬ。
屋根もるゝ　月のひかりに　さゝがにの　糸ぞきらめく。
あれはてし　庭の池水、月うけて　蔦はふ壁の
破間より　うつばりのまに　あやしかる　形をゑがく。
垣くちて　隔なければ、草ふかき　墓場ぞ見ゆる。
さゝやきつ　わたるはなにぞ　亡き人の　恨みのこゑか。
住む人の　跡さへなきに、庫裡のかた　足音きこゆ、
野狐の　かへり來しゝか、なきたまの　出で行くなるか。
訪ふ人の　たえたる庭に　糸すゝき　誰をかまねく、
女郎花　露にそぼちて　なにをかも　ほゝゑむやらむ。

白菊

柴をひろひて　たゞひとり
かへる山路の　つゞらをり
草まにさける　白菊は、
すぎし秋ごと　いもうとの
愛でてかざせし　花なれば、
いまなきかれが　おくつきの
たむけの花に　折りゆかむ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

友を懐ふ

同

をさな心に　たちかへり　友と共にも　里の子と
ぐみを摘みつゝ　あそびたる　この砂山も　かはりなく
あれ見よいまも　里の兒は　ぐみを摘みつゝ　遊ぶなり
岸に寄せては　花とちり　かへりゆきては　玉となる
波の色さへ　かはらぬに　共に眺むる　友ぞなき
波よいましは　なにゆゑに　友の面わを　やどさゞる
さはいへ波も　なさけあり　碎くるごとに　かの友の
こゝろをいまも　かたるなり　自然はいつも　愛ふかし
なさけなしとは　浮世のみ　いでや我身も　里の兒と
ぐみを摘みては　遊びつゝ　樂しき昔　しのびてむ

須磨の浦

同

松のはやしに　風そへて　あはれ身にしむ　須磨の浦
浪とむかしを　かたる間に　夜はいとふけて　月白し

時文

◎女子消息文のはやし　松岡正之著　同文館版

女子消息文の變遷より說きはじめて、文かきぶりなど叮嚀に講述し、作例は慶賀、請待、誘引、寄賴、依賴、借用、催促、慰問、見舞、謝禮、返却、報知、哀傷などの部門を分ちて、作例を示せり。其作例は、ありふれたる女作文書の如くに、古文調に流れずして、簡潔なる喜ぶべし。添ふるに阪正臣氏のいろは帖を以てして、書法を示すなどよろし。

◎水上遊戲全書　川邊德三郎編　春陽堂發行

水泳術、端艇及カノー等の漕法其他軆育論、波流の說明、溺死者救助要則等を說明して、水上に於ける各種の遊戲法を敎へ、海國々民の精神を鼓舞せんとするものなり。本書の操艇術は米國高名の操艇家ベーデン、ポーウエル氏の著書より取り、水泳術は以太利ナープルス水泳敎練場の會頭ベルナツプの實驗談より收めたりといへば、其重んずべきものたるを知るべし。

◎枯野の眞葛　水谷不倒作　春陽堂版

『枯野の眞葛』は澤邊某なる私立學校の英學教師が、近隣に侘住居の笠原某の娘お靜を愛して、兩者の間に戀愛の成り立ちしものを、お靜の母が、姉娘のさきに人の爲めに疵物にせられしより、娘の身を監督すると頗る嚴重なり。澤邊はお靜を得んとして、母ははや兩人の間に不始末でもありしかの樣に疑ひていよ〳〵お靜の身の上を嚴重に取り締り、責め苦しめ、澤邊の申出しを許さず。澤邊怒りて笠原の家に怒鳴り込む次第より、折りしも病氣の母は更に胸を苦しめて、死に至り、一家のもの、澤邊を仇敵視するに至り、澤邊は失戀の餘、他の良緣談をも辭して、職をやめ、身を失戀に苦しむるといふ筋なり。澤邊の人物の描きぶり引き立たぬ、お靜の戀の了りの飽き足らぬ節などあれども、全軆よりいへば、不倒子の上乘の作といふべし。附錄『風流紙屑買』は一の滑稽、終りのさてつもなき事に落つるなど、落語に麗つけたやうなり。

◎島左近　　溢柿園作　　春陽堂版

關が原の戰爭に武勇の名を輝かしたる島左近友之が、未だ涙々の折柄、太閤秀吉、いたく其材を惜んで、石田三成のよく之を致すをあらんには、佐和山十八万石の地を以て之を賞せんと約す。島左近は明知の臣齋藤利八の妹が、已を敵とつけねらふものをかばひて其危難を助けんと心を碎き、また義に依りて三成にかゝへられて、豪雄一世を壓する程の身を以て、僅に一家老となる處までを物語るものなり。英雄と少女との配合は、『髯男』に似、左近また髯男に似たり。左近の面目を描いて足らずと雖も、先づ面白く出來上りたる方なり。

◎日の出しま鶴龜の巻　　弦齋作　　春陽堂版
　芙蓉峯

『鶴龜の巻』とは蓬萊の巻の續きにして、石橋學士の妻お金夫人の離縁談、磐少年の戀情を畫くの巻なり。面白、可笑き事を、ごた〳〵に混ぜ合して、メチヤクチヤに讀み飛ばすには一寸面白きと、之れ弦齋一家の筆法なればなり。巻中に多くの小說家を評論する處は、弦齋が氣焰を吐く處なり。憾むらくは彼自稱哲學者先生をして、當時名うての一大小說家を評論せしめざるとを。其一大小說家とは誰れ、曰く弦齋居士。

『芙蓉峯』は福田お秋なる處女が富士山の頂上に一大電氣燈を据付たしの大望より、輕薄才子の失敗、粗大なる青年の成効中頃は悲しく、末は目出度し、書き振りは、いつもの小說と異りたるとなし。外題と所作が少々の變化をなすのみ。いつもながら罪の無いところが、我等俗人の閑讀に適せり。

◎女子教育演說　　嵩山堂版

五月廿六日大阪ホテルに會したる日本女子大學創立披露會席上に於て、松方、大隈、土方、板垣の四伯、近衞公、山田、北畠の二男、内海知事、廣瀬宰平、成瀬仁藏諸氏等の女子教育に關する演說を輯めたるものなり。曩きの『女子教育說』と併せ讀むべきものたり。

女子の肢體は概れ男子の如く動作上頗快ならず、例へば……
く、躰は横に廣く、丈才低……

女界文壇雜俎

八月中

◎北海道の女子教育　　小樽新聞八月十四日
◎家庭に於ける老人（三輪田眞佐子）　　太陽第十六號
◎私生兒及私產の比例（古川榮）　　助產の栞第十五號
◎女子教育に就きて（井上龜六）　　女鑑第百三十八號
◎佛教と婦人との關係を論じて小濵佛教婦人會に一言す（谷川流水）　　明教新誌八月六日
◎文藝に於ける女姓　　帝國文學第八號
◎起てよ多涙なる日本の婦人　　日本赤十字第三號
◎看護婦養成論（城山居士）　　同
◎高等女學校設立に就きて（坂本三七郎）　　女鑑第百三十九號
◎女德涵養の工夫（三輪田眞佐子）　　婦人弘道叢記第三十五號
◎女子の體操は如何あるべきか（篠田利英）　　教育報知第五百六十號

◎補遺

◎高等女學校　　富山日報七月廿九日
◎下女問題（片山潜）　　基督教新聞第七百二十七號

片　々

◎女博士　中村やす子ドクトルの學位を得て歸朝するや、毎日新聞の詩月旦之を歌ふて曰く、
　女博士。女博士。歸自米利堅。鯨濤鼉浪凌萬里。雪案螢燈經幾年。『巾幗猶如斯。丈夫應愧死。何人爲發憤。錦衣照桑梓。』嗚呼十萬書生在帝京。空費紙筆學不成。『腹笥空虛無所貯。半生唯識綫之助。

◎女學者　海外に學んで學位の榮を荷ふて歸期し榮を中村女史に同じうするの女學者方今其數多く、盖し十指の餘に出でん。醫道に於て彼と榮を同じうするものは、十年以前既に岡見ケイ子あり。此人内外科に通ず。

◎歐米諸大都府　の流行は普通風流者よりも、無乃商業の繁盛を計らんが爲め商人の作出する考案に基つくもの多しといふ。

◎女罪囚と國の文明　國家進歩するに從つて、女囚の數を增加す、即ち女子の智識の進歩と女權の擴張とは、罪過に陷るの陷阱を多くするものなり。英佛獨の如きは大抵男囚四人に對し女囚一人の割なるも、半開なる西班牙の如きは、男囚十四人につき女囚一人の割なりといふ。而して我邦の如きは凡そ男囚八人乃至七人に對し、一人以上に當らざるべし。而して東京大坂の如き繁華の地と他の諸府縣とを比較せば、繁華の地女囚を出すと多し。

◎婦女の先天的犯罪の不能　男囚に對し女囚の比較的少數なるは、何の國も同じき事にて、女子に犯罪の少きは、畢竟先天的犯罪を爲すに不便なるに因る。即ち

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

女子の肢體は概ね男子の如く動作上輕快ならず、例へば手腕は細く、又は太く短く、軀は横に廣く、丈け低く、人家に忍び入り、または人と格闘するを能はず、力量又微弱なれば捕獲せられ易き等、總て犯罪を爲すに不便なるに因る、歐洲に於ける調査に依れば、女にして他罪を犯す者は大抵其容貌軀格性行等凡て男子に酷肖すと、又以て女子の犯罪の少き理由を知るに足るべし。又男子にして姦通其他風俗犯を爲すものは頗る女子に類せりといふ。以上二件は監獄協會雜誌の説。

◎大赦　によりて大赦減刑せられし囚徒は全國にて女三千九百七十五人、男五万六百五十二人なりといふ。中女囚の多きは兵庫の三百一、大阪の二百七十六、東京の百九十六なりといふ。

◎寒澤振作氏　基督教徒の女子教育を稱して居候教育といふ。これも亦宗教嫌に僻するものなり。

◎女子教育談、女子教育演説　の一書は、正に以て上流の名士の、双手を擧げて女子高等教育に賛同するの讜言なり。彼等にして此意見あり、進んで更に女子教育の振作奬勵を實行に於て盡くすべきの義務あり。

◎文藝中に顯るべき　明治の女性は江戸時代と共になほ花柳陋巷の内に在らん。西歐の女子が擧止動作はわが藝人に類す、かれに於ては、普通の女性に於て文藝中の女性を得るに難からず、吾れに於ては未だ然らずといふは、帝國文學一記者の説。これまた一説。されど予輩は寧ろいはんとす、方今の文學者、高尚なる女性の性格を曉ること淺く、寧ろ花柳界の女子に接してやゝ知る處あるが爲めに、今の文藝中の女性はなほ其種の以外に出づる能はざるものなりと。

◎良人を擇むの標準　さて佛蘭西の婦人は顏の美しくして愛嬌ある顏立の男子に配せんことを好み、日耳曼の婦人は正直にして、而も法律ある男子を求め、和蘭の婦人は柔和にして決闘などを好まぬ男子を望み、西班牙の婦人は妻の言分を跳ねつけ、妻が無作法の事ある場合には強面く當るなどは良人たる身の常なりとして大に之を喜び、さもなき男子は意氣地無しとて之を嫌ふ、以太利の婦人は文學者若くは詩人風の思想ある男子を愛し、露西亞の婦人は歐洲にては野蠻人なりとして擯斥さるゝ如き性質の男子を愛し、丁抹の婦人は常に室内に在りて外國旅行などをなさざる男子を良人に持たんことを望み、英吉利の婦人は風采堂々として氣高き性質の男子を求め、合衆國の婦人はその位地の高下を問はず、容貌の美醜を論せず金さへあれば支那人にても構はず、との比較を立つるものあり。こは一應閾情には叶ひたれども、強ちに概ね如斯しとはいふべからず。而して本邦の婦人は、夫れいづれに於て良人撰擇の標準を立つるや。金か美か、いづれにか祖するか。抑もまた兩祖せんとするか。

◎女子の體操　女子の體操は男子のと異るべしとは、多くの説なれども、高等女子師範學校の篠田利英氏は、女子の體操もまた男子の如くなるべしと説く。

時報

◎山口高等女學校の組織變更　曩に其噂ありし私立山口高等女學校は愈其組織を變更することゝなり、八月廿五日を以て一旦廢校となし、九月一日より新に毛利山口高等女學校として、開校せらるゝ筈なれども其準備上中途なること多きを以て、到底同日より開校するの運には至らざるべく、諸規則等を改め、教職員を定め、愈々授業するに至るは來月末ならんといふ。

◎女學校に巡査駐在　奈良縣高等女學校にては九月一日より、巡査三名を聘雇して、校内に駐在せしむることとなれりと。其必要は果して何れより起りしか未だ知ることを得ず。抑も校内取締の爲めに、奸人盜賊等などの襲來を防がんが爲めなるか。

◎清流女學校の紛紜　名古屋市東片端町なる清流女學校は、美以美教會に屬し、曩頃アーリング孃の校長となりし以來、校内兎角圓滑を欠ぎしが、此程校主と校長との間に衝突を生じ、校主見田成倫氏は、爾後現校長と提携して、事を執らざることに決し、長文の陳情書を調製して、關係者一同へ頒布したりといふ。

◎ドクトル中村安子　中村安子の本年四月を以てペンシルバニヤ齒科學校を卒業して、ドクトルの學位を受けたることは、兼て報じたるが如くなるが、同女は八月廿六日横濱入港の便船にて歸朝せり。聞く處によれば、同女は千葉縣上總山邊郡眞龜村の人にして、本年三十二才家世々醫を業とし、父養軒氏は自村に於て開業せしが、安子が渡米の前に病死し、兄渡邊養氏亦た醫術を修めて、現に東京京橋區築地に於て開業す。安子は八才の時横濱なるカソリック派附屬の佛和學校に入學し、二十四才迄同校に止まりたるが、其後學校を出で京橋區山下町女子講習學校の教師に聘せられて專ら語學の教授を擔當し、又た築地二丁目（故藤田茂吉氏住宅の跡）に私塾を設けて、編物英語等を教授せしに、築地邊に住する貴顯紳士の令孃等入學するもの多く、日々に盛大に赴きたるに、明治廿四年シカゴ博覽會の開設を期として渡米し一富豪の補助を得て、同學校に入學し、多かる名譽を得て今回の卒業となりたるものなりといふ。

◎手藝の師の爲めに壽藏の碑を建つ　岩手縣稗貫郡根子村金田一ぎん子は同縣花巻の人にして、父を次郎兵衛と云ひ、父病歿の後母に伴はれて、同郡四十二丁目村に移り住みけり、ぎん子幼少の時より織紡の業を好み、友と遊ぶにも女紅機織の事を擬して、日の長きを忘れ、苟にも騒がしき遊戲を爲さゞれば、人々奇異の思を以てぎん子を迎へけり。長ずるに及びて機業の道に精しきこと專門の人に讓らず、最も巧みに綾錦を織出せり、若し名工の織物を見る時は心を潜め、思ひを凝して絲を解き、縷を剖き、以て其織出の方法を窮め、習はずして自得するを常とす。されば片田舎の事とて名匠巨工の教を聞かずと雖も、自然斯藝に熟達して、如何なる細紋にても織出さずといふことなし。ぎん子二十餘歳の時良人を迎へし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に間もなく、其人中風症を發して手足自由ならず、全身不隨となりければ、ぎん子心の限り介抱して、十二年の久しき恭養一日の如く、貞婦の名を一鄕に知られけるが、良人と母とは相續きて黃泉の人となり、家産殆んど罄きたり。此よりぎん子は手慣れたる機業を以て、或は人に雇はれ、或は村内の婦女に其道を敎へて、自ら給することゝなりぬ。恁てぎん子の名は遠く四鄰に傳はり、爭つて入門するもの頗る多く、ぎん子は倦まず怠らず、丁寧に之を敎授しけるほどに、弟子の業はいよ／＼進み、闔鄕機織の隆んなること未だ曾て有らざるほどなり。ぎん子今年五十八精勵にして、業を婦女に授くること一日の暇なければ、いづれも皆な之を德とし、先月中旬中島みき伊藤よし伊藤てふ等發企となり、大橋のぶ藤井勝右衛門照井熊太郎等之を輔け、ぎん子の爲めに一の壽藏碑を同村圓通寺門前に建て、且つ一大祝宴を張りて、謝恩の意を表せり、會するもの百數十名頗る盛會なりしとぞ。（中央新聞）

◎活水孤女院と慈善音樂會　長崎港居留地活水女學校にては、年來、其附屬として育兒院を熊本縣に設け、白水孤女院と稱し居る處、規模何分にも狹小にて十分目的に應ずる能はざるより、今般福岡縣糟屋郡席内村なる仝校卒業生某女、敷地一萬二千餘坪の使用權を永代に寄附し、依つて之を仝地に移して、一大土工を起すことゝなり、資金は之を英國に募ることゝなりたれば、仝校生徒亦爲めに爲す所あらざるべからずとて、八月廿四日慈善音樂會を開きしに、中々の盛會にして、特別劵料百二十餘圓を得たれば直に之れを寄附したりといふ。

◎金谷家塾　故金谷昭氏の未亡人錠子は此度東京麴町區飯田町六丁目廿三番地に一の家塾を開き、地方女子の東都公私立學校に入るものを監督し傍ら英漢數簿記學等を敎授しなほ又通學生をも許可すといふ。

◎明治女學校基本金贊助　明治女學校は、東京市下にて最も舊き著名の私立女學校なるが、去年二月不幸にして類燒の厄に罹りしかど、有志の義捐により忽ち新校舍と廣大の地積とを得たるに付此際其の高等學科を擴張して他日女子大學となすの基本を作らんとて、過日來校長巖本善治氏來遊し、諸有志の贊助を求めたるに、札幌にては坂本書記官、酒匂部長、田邊技師其他を初めとし谷、南部、水野、植村、藤村の諸氏一同に喜捨を諾せられ、小樽にては高野、大竹、船樹、金子、倉橋、大塚、竹村、寺田の諸氏、郡長、書記、署長等總べて贊助を諾したりと云ふ。（小樽新聞）

◎富山縣高等女學校設立の調査　此程私立富山市敎育會長より富山縣知事へ高等女學校設立の建議を提出したるに付、石川知事は目下縣廳學務掛主任に命じて設立の要不要を調査せしめ居るよしにて、調査の結果之を必要なりとせば敎育會の委員が陳情運動を爲さゞるに先たち、縣廳は進んで設立の計畫を爲すべしとなり。

◎孤女救助　七月以來越後地方には數度の洪水ありし爲、父母なき多くの孤女あるに至りしが、爰に大阪慈惠女學院にては、女兒に限て救養すべき儀を新潟縣知事に申し出て、知事は其旨を郡市町村役場幷に警察署へ達したり。

◎孝婦の受賞　福井縣今立郡粟田村角長左衛門妻マツは、舅姑に事へて孝養を盡くすこと十六ヶ年一日の如く、其行奇特なるを以て、此程福井縣知事は之を賞して、金五圓を下賜したり。

◎徒弟子守兩敎育所　長野縣下伊奈郡飯田小學校長中村氏は、該所設立に熱心し、遂に此頃設備開始したるに、徒弟は七人子守は七十人あり。徒弟には修身讀書作文算術を、一日二時間つゝ、子守には修身讀書算術唱歌手工等を授くると云ふ。

◎佛敎婦人智恩會　同會は神戸に在りて、佛敎を奉じて國恩に報い、百般の慈善事業を擴張するを以て目的とし、會員專ら勤儉を守り、一日に一厘づゝを貯へて慈善費に充つといふ。

◎高松私立高等女學校　同校は目下生徒六百餘名に及べりとか。同校は地方有志の寄附金、地方税の補助及び授業料を以て維持し、學科は普通學科、裁縫科、活花點茶等女子必須のものにして、他家に嫁して良妻賢母たる女子を養成せんとを目的とすといふ。

◎女子農學校　露國女子教育社會に其名を知られたる、コルウヰン、ヒオツロ、フスカヤ夫人は、二年前女子高等農事學校を設立せんと發企し、東西に奔走し、之がため、或は公開演說を爲し、或は當局者に說き、或は貴婦人等を勸誘して頗る斡旋せしが、其勞水泡に歸せず、本年に至りて露國農務大臣は屬僚をして此學校設立の取調に着手せしめたり。而して同校設立の贊成者の一人なる、ウルソフ公爵夫人は差向のウゴロド縣下の自邸に、女子初等農學校を設立せんと、既に創立費の募集に着手せりと云ふ。

◎世界第一の富を有する寡婦　名はセノラ、デ、カーシノ、南米智利國ローダ市の人なり。智利及白露に於ける銅山は大概其所有に屬し、汽船及帆前船を有すること百餘艘、其の邸宅頗る壯大なり。南米にての評判に據れば、其の近隣にて有する富にても、二億圓以上にして、且つ倍々增殖す。其の奢侈贅澤を爲すこと非常なれども、然も其の收入の半額以上を消費すること能はず、一年の收入高は一千六百万圓以上ありと云ふ。此の富の過半は父及兄より讓受けたるものなれども、其の餘は自己の腕にて作れり。抑も此の暴富を致したる始めは父が智利にて銀山を開き、其の後銅山事業に從事せしに在り。父の生存中既に智利及白露の銅山を悉く所有せし程にて、現今歐羅巴にて使用する銅の四分の三は其の所有の銅山より供給すと云ふ又ローダの全市は其の私有にして、市内一粒の土、一箇の家も其の所有にあらざるは無し。其の住民一万三千人は此の女の工業に依て衣食す。其の邸宅諸所にあれども其最も壯大なるものはローダ市に在り。一面、入江に臨み、三面山を以て圍む。又サンチヤゴに有る別莊は白色大理石を以て築造せしものにして、其建築費二百万圓を要したりと。又マキールに有る別莊には至大の庭園あり、其保存の爲常に園丁を使用すること二百人なりと。此富の所有者セノラ、デ、カーシノは本年五十五歲にして色黑く丈高き美人にして、近時米國に遊ばんとせり。（都新聞）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●白國ド、ラ、ブレイ氏著　●田口卯吉君序
●英國ボーラード氏譯　●牧山耕平君重譯

訂正再版

經濟學粹

肖像入 小傳

●第一高等學校教科用

四六判五百餘頁
布表紙製本
價郵税共八十錢

此書は新派經濟學者中別に一旗幟を建たる碩學ド、ラブレイ氏か普通經濟學の體例を革新し一機軸を出したる新著にして其主義は道德の實踐爲政の寛公を旨とし以て利用厚生の道を講ずる者にして泰西の學校は過半此書を其教科書に用ひ居ると云ふ以て其良書たるを知るべし、今や再版に臨み大いに**訂正**を加へ更に一層の光彩を添へたり、斯學篤志の諸君請ふ愛讀あらんことを

發行所 東京京橋區彌左衛門町 合名會社 **經濟雜誌社**

賣捌所 東京。丸善、小林、東京堂、中西屋、團々社、●大阪。岡島、梅原、松村●京都。大黒屋、東枝、其他書肆

進步黨々報

第九號(九月一日發行)

◎毎月二回(一日、十五日)定價一冊七錢〇六冊(三ヶ月分)前金四十錢〇十二冊(六ヶ月分)前金七十八錢〇廿四冊(一ヶ年分)前金壹圓五十錢◎不要郵税

論説 積極的方針(長谷場純孝)◎財政整理(箕浦勝人) **政務資料** 木浦の地勢概要◎日秘間の仲裁條約◎營業税改正に關する資料(桑名、新潟、上田諸商業會議所の意見) **寄書** 獵官亦可なり(山田一郎) 政事家に對する勞働者の期望(片山潜) **評論** 雜報は神聖にして犯すへからす◎地租の増徴斷して不可なり◎出でよ軍人を畏れさる政治家◎對支那貿易◎台灣の施政◎伊藤侯と外交問題◎新著批評◎板垣伯の演說振り **雜錄** 家庭及執務に於ける獨乙皇帝◎消閑零話◎詩二首◎余をして全管せしめよ **外報** 歐洲外交の近態◎獨帝還り佛統領行く◎外六件 **經濟事情** 何ぞ銀塊相場の下落を憂へん◎銀の生産費◎外五件 **黨報** 我黨の近情◎三多摩支部の設置◎山形、青森、大分縣議員半數改選の結果◎黨員の入脫◎黨員の去來 **時事** 政界の近情◎當代の奇材陸奥宗光伯◎時事日記

發行所 東京麹町區内幸町一丁目三番地 **進步黨々報局**

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

統計集誌

每月廿五日發兌
定價金貳拾五錢

第百九十四號 目次 (八月廿五日發兌)

窮民統計調製に就ての私見……田中太郎
農業信用銀行……小笠原金三郎
本邦三大都の人口(完結)……横山雅男
窮民統計論(完結)……相原重政
佛國キュイズの共働組合に就て(其三)……田中太郎
明治三十年勅令第七號發布當日減刑囚徒數……篠崎亮
明治三十年勅令第七號發布當日減刑囚徒刑名別……篠崎亮
本邦輸出入重要品元價の金銀貨價額對照……梅溪生
明治二十八年度末現在郵便貯金……相原重政
帝國森林原野統計(承前)……白浦漁夫
本邦人生活費一斑……横山雅男
世界ノ海灣……伊東祐穀
世界ノ大湖……伊東祐穀
東京七月及八月溫度四ヶ年比較……武市翁壽
雜記
●露國形勢總覽の批評●和蘭社會民政黨の決議●勞働者保護に關する國際會議の議案●歐米諸國の貯金●新渡戸稻造氏よりの來翰●正誤

發行所 東京市京橋區山城町六番地 東京統計協會

櫻井成明譯
女學雜誌社出版書目
胖立比物語

三輪田眞佐子

自由黨々報
第百四十號○九月十日發行

◎黨論○拓殖務省と工務省の設置
◎論說○今日誰か先つ義を唱ふ(江原素六)○青年政治家(佐藤琢治)○政黨革新策(日)(鬼芙容)
◎雜錄○巴黎人と問答○閑日月○如是社會觀(五)○波枕○江畔吟哼○經濟消息
◎世界◎黨報◎時事◎新刊紹介
◎發行○每月二回十日、廿五日
◎定價一部金六錢十二部六十六錢廿四部一圓廿錢
◎發行所 東京芝公園 自由黨々報局

◎切拔通信要旨

●切拔通信をなすべき槪目は農工業商政治法律外交貿易政黨倶樂部教育宗教歷史詩歌運輸交通土木建築鑛業山林美術技藝各人身上に關する事等凡そ諸新聞紙上掲載の件は小說廣告に至るまで其委托に應し精閱遺漏なく勉めて配達を迅速にして以て愛讀者の便益を期す

東京市京橋區采女町廿一番地
東京通信社附屬
新聞切拔通信部

◎切拔手數料大要

●一己身上に止まる通信は一ヶ月金貳拾錢とす●一事業又は一事物に止まる通信は壹ヶ月金參拾錢より金五拾錢まで●一會社又は一團體は全般に關する通信は壹ヶ月金五拾錢より金壹圓まで●前記の事項と雖とも關係の範圍廣く日々記事の多數なるものは臨機の契約を爲すことあるべし●月數に拘らず件數にて委托せらるゝものは東京は十件に付金貳拾錢地方は郵稅を併せ金參拾五錢とす尤も細事項は總て號外として件數に算入せす●本社切拔通信規則書御入用の方は御通知次第郵送すべし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌社出版書目

櫻井成明譯 緋立比物語　正價金廿八錢　郵稅金六錢

嚴本善治著 公娼可滅　正價金三錢　郵稅金二錢

同 教育講義　正價金七錢　郵稅金二錢

横山雅男著 婚姻論　正價金十二錢　郵稅金四錢

中島湘煙女史著 小說 善悪の岐　正價金十七錢　郵稅金四錢

島田三郎、植木枝盛合著 廢娼演說　正價金三錢　郵稅金二錢

阿波鳴門左衞門作 戲曲 桂吾郎　正價金十二錢　郵稅金二錢

松山高吉著 邦文學　正價金十二錢　郵稅金四錢

嚴本善治著 吾黨の女子教育　正價金十錢　郵稅金二錢

故鈴木弘恭述 百人一首講義　正價金廿八錢　郵稅金四錢

同 文法口授　正價金十二錢　郵稅金四錢

布川靜淵、小此木秀野合著 俳諧史傳　正價金廿七錢　郵稅金四錢

故若松賤子英文集 巖本嘉志子　正價金六十錢　郵稅金六錢

三輪田眞佐子著

女子の本分

第七版　定價金廿五錢　郵稅金六錢

東洋の君子國秀麗端正なる女教自然に存す之を涵養し之を發揮し以て貞淑賢良の婦女を養成し雄大忠誠なる國民の慈母たらしめんこと是れ『女子の本分』の主張する所なり今や江湖の望に應じて第七版の成るを告ぐ苟も女子教育に志あるものゝ座右一日も欠くべからざる良書たるは世の許す所なり

發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地　國光社

女學雜誌一手大賣捌　東京神田區表神保町　東京堂

明治廿七年二月十四日內務省許可
明治三十一年九月十四日印刷
明治三十一年九月十五日發行

東京市麴町區下六番町六番地
發行兼編輯者　嚴本善治

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十六番地
印刷者　島保藏

東京市麴町區下六番町六番地
發行所　女學雜誌社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
（電話本局十九番）

日本宗教八月發行分は主任記者に止むを得ざる事故ありて休刊致候間此段讀者諸君に謝告す

日本宗教社

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY